萬葉集佳調　全

911.1
マ
全

長脊連真幸大人撰述

萬葉集佳調
同 拾遺
合刻

江戸書林 尚古堂

萬葉集佳調序

芳山の花よふれてきん あやなきこきめても
こゝろありてみ秋野みえきよりけ
てをやかなし神さつまこそ色よみへり
されハ津世のこゝろ出きたりけるを
志られたるる代々あれしかとも
おのつからさためよう詞つ秋やか

むかし長岡といふところの海ちやうにある
跡ところの何はてのちはれ見ての女より
ゆふつけ鳥はいまそまかりまうつれ
てあれの宿のゝこゝろなうたけり
万葉集の中乃歌くれ多かりし出
まもなくこのことゝもえしひめてゆき
よいつり給へなきくせものをかしきて

あかつきのみや偏まらく跡ゝこと哉
しらぬ信の夜明のむかなむ便とせん
やうやうはこの頃あはきさたいまたかへり
帰りし月日も隔て遠しつねそ
心ろてとくよみそてあはれいてから
かせつかはす道しらてなき
さうてのちくひる此世つなきもしのかれ

ゆふくれのくらき秋の野山よりいてくる
かけのまつしもおきそふなかしけるそ
うれしさのまことのこゝろの月影ゆく人

橘為仲

古歌は紙へいろはを書きて八
いろは手本をよく見て手本よく見て
らいてもよくかくよくかけ歌ならず
かの古歌よく見えよく見よえ
よいハ文よくかきならぬかくいふてハ

いろはをよくならひおぼえてかなもよ
くしるして手本の字ハ紙乃
上へ書写す事ハまづよく見てよ
しをえらひてうつしきれを
これのうきまれぞよくつんで形をよ

くるしてよくよくならひて
古まわぬ字よみなよく志て可
うき古梅わ乃うきまみせむ次
当やまり八古きぬ字の書写しよく
見えぬ形不よくえらひてよくよむ

なく時に限る物かはもしはしも宜婦
見始めよみをもみし給ふはさわかれぬかな

本居宣長

万葉集はいとも古き歌どもなればおのづから
今のよにはあはぬ事をひてあるはよろしからず又は
むかしの言葉の書はなかれおほかた詞乃
いたくあやしきことおほかるはいとつたなくしく
あるはをおほかるものくさへおゆるをたは
ころそはいまつてよみ紀あしきおもしひなくひろく
ふりゆなるによりて古今集よりのことをいりく

えらへる集なすゝめいなるへしさるをたのゝたえひの
しほりひのをはむかしよりいましくふり歌
多年よむ人ふるきあしよき歌もわかちえらひ
たゝすしてこゝろにいましへありをおりふう
よき歌いてこすしてかゝりくはきなきこゝへ
のこすなりもそしゆきてみやひなるはよみ出川
歌りもあつはこゝり真幸おもへらく此集乃

中なるすさも古人をよくしのひなるなのい
まし人とまとめりなへしむかきりはえりつく
してうひまなひのはられたつぬるしもてなち
ちかきらなるみひよたるよしに思こゝろゆきうよふ揩
千載めしよはなりのまそそいるさきるむ
はらめてよとすすめてまつしかやつてつゝまおらして
一のまきよりはしめてせきれなりき続えらし

かきあつめたるは世にうたゝかたなきひとをさうちそか
中まりことのはのおもむきあくれなるひわかれいたし
ひとつはこの家とたくらへぬきいでてそれはいふを
たゞやすくよしえらむへきあるへしの佳調なりてうるを
まことはいへともつゐるべてはけれ条乃かきぬる
まこりしましてよろこひの意をあらはしむせん
なにはたることを佳調となむ名つけつるは萬葉の

世乃萬葉佳調なりといへる也されとこゝにた
えらへるはことさらにかくなむ寛政五年
八月大江川のほとりのやどりにて紀元乃
しもの國人安東真幸志るし侍

萬葉集佳調上巻

短歌部

春歌

巻二十 正月三日内裏に諸の王たち臣たちをめして玉箒をたまひ宴したまひける時よめる歌　右中辨大伴宿祢家持

はつはるのはつねのけふのたまばゝきてにとるからにゆらぐたまのを

おなじく七日宴に侍りてよめる

みづとりのかもはのいろ乃あをうまをけふみるひとはかぎりなしといふ

巻五 梅花をよめる　筑前守山上憶良

はるさればまづさくやどのうめのはなひとりみつつやはるひくらさむ

少令史田氏肥人

うめの花いまさかりなりもゝとりのこゑのこひしきはるきたるらし

小野氏淡理

かすみたつながきはるびをかざせれどいやなつかしきうめの花かも

巻八 題しらず

はるのゝにすみれつみにとこしわれぞのをなつかしみひとよねにける

山部宿祢赤人

わがせこにみせんとおもひしうめの花それともみえずゆきのふれゝば

あすよりはわかなつまんとしめしのにきのふもけふもゆきはふりつゝ

くだらのゝはぎのふるえにはるまつとをりしうぐひすなきにけんかも

厚見王

かはづなくかみなびがはにかげみえていまかさくらんやまぶきの花

丹比真人乙麿

かすみたつのゝへのかたにゆきしかばうぐひすなきつはるになるらし

雉をよめる　家持

はるのゝにあさるきゞしのつまごひにおのがあたりをひとにしれつゝ

柳をよめる　大伴坂上郎女

うちのぼるさほのかはらのあをやぎはいまははるべとなりにけるかも

巻十　よみ人しらず

わぎもこが[illegible]はるのやまべは[illegible]かも

題しらず

ひさかたのあめのかぐやまこのゆふべかすみたなびくはるたつらしも

かぎろひのゆふさりくればさつひとのゆづきがたけにかすみたなびく

こらがてをまきむくやまにはるさればこのはしのぎてかすみたなびく

此二首ハ柿本人麿を歌の本の才よりつ
いなきらにゆきてかりやもかならひのをゆらてらへよらずかりあめと
きみがすめやとのさかゆきたへぐもりゆきかへのさかひに　わかれぬ
ゐるなしとかかる
しかるびくはうたをとりしわがかたのやまとのうたよりてひとをよせつき
ふめのそれさへとしうべきハへおやばよくしくしわかりけりしひとのこゝろ
わがやしろしたまこそ額田のやまゆゑまつりてみなびかへせらのつらね時
ふゆごもりはるさりくればなかざりしとりもきなきぬさかざりしはなも
うめのえだよるそゝてうつろふつゞひまのそねこころへまわりゆきて
むしろさきのねをふるきのけるのふハきみをかくつるべいきて
歌とらかる

きのはをみてハもみぢをばとりてぞしのぶあをきをばおきてぞなげく
ふゆもりてたちまちたりしわかきひとのやまぶかさときにかさなれ
吟おわらひ
わしこれをおかしやひとハいにしへもあるべくをかしてことつくへ
額田おしたまへく
ふゆもりてたくさしきあれべしつきハいつくゆきにかくハさかり
巻九 三月三日宴歌　家持
かうらひめこねをこかへてあらぶちにたなびくわがせこそれのみぞき

夏歌

巻一 持統天皇乃おほみうた

たるまぞてなみださへたえしちりしくのこゑも[illegible]

巻八 志貴皇子の御うた

かみなびのいはせのもりのほとゝぎすけなしのをかにいつかきなかむ

題しらず 刀理宣令

もののふのいはせのもりのほとゝぎすいまもなかぬかやまのとかげに

石上堅魚朝臣にこたふる歌 大伴旅人

たちばなの花ちるさとのほとゝぎすかたこひしつゝなく日しぞおほき

巻十七 平城のふるさとを思ひてよめる 家持

あをによしならのみやこハふりぬれどもとほとゝぎすなかずあらなくに

かきつばたきぬにすりつけますらをのきそひ[illegible]

秋歌

巻八 舒明天皇の御うた

ゆふされバをぐらのやまになくしかのこよひはなかずいねにけらしも

大津皇子乃御うた

たてもなくぬきもさだめずをとめらがおれるもみぢにしもなふりそね

七夕歌 憶良

あきかぜのふきにし日よりいつしかとわがまちこひしきみぞきませる

巻十 よみ人しらず

ひさかたのあまのかはらにぬえどりのうらなげましつすべなきまでに

ゆふつゞもかよふあまぢをいつまでかあふぎてまたむつきひとをとこ

たなばたのいほはたゝてゝおるぬのゝあきさりごろもたれかとりみむ

あきかぜのふきたゞよはすしらくもはたなばたつめのあまつひれかも

あきかぜのきよきゆふべにあまのがはふねこぎわたるつきひとをとこ

きみがふねいまこぎくらしあまのがはきりたちわたるこのかはのせに

あまのがはとほきわたりはなけれどもきみがふなではとしにこそまて

あまのがはうちはしわたせいもがいへぢやまずかよはむときまたずとも

たなばたのそでつぐよひのあかときはかはせのたづはなかずともよし

あまのうみにくものなみたちつきのふねほしのはやしにこぎかくるみゆ

巻十五
おほぶねにまかぢしゞぬきうなばらをこぎでゝわたるつきひとをとこ　此一首ハ林本人麻呂歌にのる

巻八　聖武天皇の大御うた

けさのあさけかりがねさむくきゝしなへのべのあさぢぞいろづきにける

題しらず　三原王

あきのつゆはうつしなりけりみづとりのあをばのやまのいろづくみれば

鹿をよめる　湯原王

あきはぎのちりのまがひによびたてゝなくなるしかのこゑのはるけさ

巻十
やまべにはさつをのねらひおそるれどをしかなくなりつまのめをほり

よみ人しらず

巻八　題しらず　大伴宿禰稲公

しぐれのあめまなくしふればみかさやまこずゑあまねくいろづきにけり　ぬれ

安貴王

あきたちていくかもあらねばこのねぬるあさけのかぜはたもとさむしも

私房に宴する歌　豊浦寺の尼

うづらなくふりにしさとのあきはぎをおもふひとどちあひみつるかも

題しらず　　　藤原朝臣八束

かすがのにしぐれふるみゆあすよりはもみぢかざさむたかまとのやま

竹田の庄をよめる　　大伴坂上郎女

こもりくのはつせのやまはいろづきぬしぐれのあめはふりにけらしも

題しらず　　家持

さをしかのあさたつのべのあきはぎにたまとみるまでおけるしらつゆ

巻九　弓削皇子にたてまつる哥の　よみ人しらず

さよなかとよはふけぬらしかりがねのきこゆるそらをつきわたるみゆ

此歌ハ人麿歌集の中にいづ

巻十　萩をよめる

まくずはらなびくあきかぜふくごとにあだのおほのゝはぎのはなちる

こほろぎをよめる

にはくさにむらさめふりてこほろぎのなくこゑきけばあきづきにけり

かはづをよめる

みよしのゝいはもとさらずなくかはづうべもなきけりかはをさやけみ

露をよめる

しらつゆをとらばけぬべしいざこどもつゆにきほひてはぎのあそびせん

あきたかるかりほをつくりわがをればころもでさむくつゆぞおきにける

もみぢをよめる

つまごもるやのゝかみやまつゆしもににほひそめたりちらまくをしも

このごろのあかつきつゆにわがやどのはぎのしたばはいろづきにけり

あきさればおくしらつゆにわがかどのあさぢがうらばいろづきにけり

いせがらでるきむくや山のわきつゆまでかしまみぢのちりまつくさしも
あきかぜのそひよそふけがらがゞきれたこののえらぞいろつきまする
いかがかとうまらくくおそろしくいそるやまくちこえくれじかわなかちりつく
あきてのかげはもみぢがもでのるかづらまみやまのころもたいはしもるかも
ふるさとのそのかみちぢみだしたそみかくてなすがやのこしもねそめのさめ

此ハその人庵主臥巣乃井ふい河

同しくよめる

さなしのみつらしらしやまのかきうぞするわさたかくらし志もふるとも

月をよめる

このころハさらすみたぬくしかゞのねのきこゆるをしはつきたかふる
まるがせこがかざしのはぎさるおくつゆとさやうるまなつきにてるよ

志らつゆをさらふかなしたるものづきのおもてにのきのつきるを化お翁

雪をよめる

あさらぶかなかのつぶきのおかひぞのいづくらすてぞわりのかみそん
峯かすし言あきる時の弓　家持
今さのあさんにのきかぜさむしとかつひとからきなうんそうちかし

史生土師宿祢道良

ぬはなてみちハふみぬらしたるくしげふくかみやそふつきかくふきぬ

奏平 秋乃野をおもひてよめる　家持

えやえびのつでつけでらもあきえぎにふかひずりきたのてとのさ
あきみてしハいまそのゆのおかのふみをさとかこみのそのまさひるを

冬の歌

巻八 雪の歌とてよめる　舎人娘子

おほくちのまかみのはらにふるゆきはいたくなふりそいへもあらなくに

元正天皇の御製おほんうた

はたすゝきをばなさかふきくろきもてつくれるむろはよろづよまでに

巻十 もみぢをよめる　よみ人しらず

やたのゝのあさぢいろづくあらちやまみねのあわゆきさむくふるらし

題しらず

まきむくのひばらもいまだくもゐねばこまつがうれゆあわゆきながる

あしびきのやまかもたかきまきむくのきしのこまつにみゆきふりけり

此二首は人麿歌集の中にいづ

相聞

巻二 石川郎女をよばひてよめる歌　久米禅師

あづまどののさきのはこのにのをにもいもがこゝろにのりにけるかも

大津皇子ひそかに伊勢神宮にくだりてのぼりたまひし時大伯皇女のよみたまへる

わがせこをやまとへやるとさよふけてあかときつゆにわがたちぬれし

大津皇子石川郎女におくりたまへる

あしびきのやまのしづくにいもまつとわれたちぬれぬやまのしづくに

かへし　石川郎女のこたへまつる

吾

わをまつときみがぬれけむあしびきのやまのしづくにならましものを

よしのゝかミこけむせる松の枝をとりて遣せし時よみて
たてまつるうた

みよしのゝたまゝつがえハはしきかもきみがみことをもちてかよはく　額田女王

園臣生羽の女にあひていくばくもへずして病る時
よめる　三方沙弥

たちばなのかげふむみちのやちまたにものをぞおもふいもにあはずて

巻三　大伴家持におくる歌　笠女郎

みちのくのまのゝかやはらとほけれどおもかげにしてみゆといふものを

巻四
しらとりのとばやままつのまちつゝぞわがこひわたるこのつきごろを

やみのよになくなるたづのよそにのみきゝつゝかあらむあふとはなしに

きみにこひいたもすべなみならやまのこまつがしたにたちなげくかも

近江天皇をしのひまつりてよめる　額田女王

きみまつとわがこひをればわがやどのすだれうごかしあきのかぜふく

題しらず　柿本朝臣人麿

みくまのゝうらのはまゆふもゝへなるこゝろはおもへどたゞにあはぬかも

をとめらがそでふるやまのみづがきのひさしきときよおもひきわれは

なつのゆくをしかのつのゝつかのまもいもがこゝろをわすれておもへや

駿河うねめ

しきたへのまくらゆくゝるなみだにぞうきねをしけるこひのしげきに

天皇にたてまつる歌　八代女王

きみによりことのしげきをふるさとのあすかのかはにみそぎしにゆく

題しらず　大伴坂上郎女

おもはじといひてしものをはねずいろのうつろひやすきわがこゝろかも

市原王

あごのやまいほへかくせるさでのさきさではへしこがゆめにしみゆる

大伴宿祢像見

いそのかみふるともあめにさはらめやいもにあはんといひてしものを

大伴宿祢家持におくる歌　中臣女郎

かすがやまあさゐるくものおぼゝしくしらぬひとにもこふるものかも

返しうたす

廣河女王

こひぐさをちからぐるまにななくるまつみてこふらくわがこゝろから

像見

ひとせにはちたびさはらひゆくみづののちにもあはんいまにあらずとも

豊前国娘子大宅女

ゆふやみはみちたづたづしつきまちてゆませわがせこそのまにもみん

家持

娘子におくるうた

ちどりなくさほのかはとのきよきせをうまうちわたしいつかかよはむ

跡見田の庄より女子大嬢におくるうた　大伴坂上郎女

あさかみのおもひみだれてかくばかりなねがこふれぞゆめにみえける

大伴宿祢家持におくるうた　紀女郎

たまのをゝあわをによりてむすべらばありてのちにもあはざらめやも

久迩京にありてならの宅にとゞまる坂上大嬢をおもひてよめる

家持

ひとへやまへだつるものをつきよゝみかどにいでたちいもかまつらむ

巻八 妹坂上大嬢におくるうた　大伴田村家大嬢

つだられぬくあきさだがりつのつばさにれはなにかさなるくれ

ふるさとのたかくしのたとのゝかたぎはさつゞやゝいのまつげきや

返しうた　大伴坂上郎女

なつの乃志げみにさけるひめゆりの志らえぬこひはくるしきものぞ

小治田朝臣廣耳

ほとゝぎすなくをのへの乃うのはなのうきことあれやきみがきまさぬ

坂上大嬢におくるうた　家持

たちばなのみのかほどれおやかなることえつゝはゝはわすれかねつも

久迩の京よりなたゝるの坂上大嬢におくるうた

あしびきのやまべにをりてわきかぜのいもがたもとにかへるべきかも

巻九 筑紫の國よりのぼる時京の國の妹に経そへてよみける

いそのかみふるのやまのやまかいでひとつのまよ

検税大夫

よき人のよしとよくみてよしといひし

巻七 にいぶより

えいわせがはすてつくばのみわたきなやまこえてみなむ

やまうたら返

つきくさにころもはすれどあさつゆにぬれてのゝちはうつろひぬとも

つきくさにころもいろどりすらめどもうつろふいろといふがくるしさ

巻十一 よみ人しらず　ておもひをくらしつ

としのはにきけいはうつるたまのをのながくもがもときみをまつかも

巻七 ふかきよのひ

ちとせのえ乃わかこゝはなのかすみたちきぬきもわけきえんひちかきたゝむ

巻十 うくひすのかすみのそねのうつりもかれらきこてもあらやきさまさね

わがこゝろそはおくてもわくめわがやどのなれなるはなさくふかこゝ

らそれはのこよつくかこひんくれちるねの住吉つじのあれのひちにてまつか

さらしのりものまちきこなりとなれはかしのほとゝになりくらなせし

おちこはきのちらのまちそやすはひとひわのこひいまるともつすいも

わがのやどのなきさゝられよくるちこゝぬすまふたやきまてこまちものこひと

ふかちりくのちゆゝみしききのわきこはぎさきてちらふきこまくみやちらのねさ

田をよみ

わきこのた乃かむそのあるかくよわきわかさへものおもひつれなるとのと

たつがねのきこゆるゝおふいかにしてわれたびちおとにゆきつゞきて

露によみて

あきはぎのさきちるのべ乃ゆふつゆよぬれつきてかせらはふみわくも

鳥をよみ

ちるされバかひのくさくさこゑとしてれハふやしきそあきるか

ほのかにぞひきつくさつまおもふのそらもしわれがわのつかねつね

ねやにも

麻をよみ

きりしのわきふのたのてくさつのてかくろひのほてありて ならふのならひ

月をよみて

巻十一 題しらず

すこそふひきうえしらぶれしやとれがちちきかぜふそてつまがくるゝ

たとへばくぜのきこえぬか、はらふるえぞぎしていたるよいのちもいたからなきこと
さとしろのくぜのこのりうて
此序てハ人麿の歌集の并よいつ
めそらてかのいたがくれかてならひたらわ弁るきこゆるよなひきてぬらん
わさねのこされハからづくしつくしきこみかくこすくられてかのを
いやがうでまのけしえりふあんうへのこゝろもかくしまさいひつぞめる
あきらたゝのおくらかへおもそていはとわれがぬるよハらぬくてもしそへうける
おしひきのやまさくらとるとわなおそてわのてるやきるとたれとじむる
巻十二 たつらてゐのとしのおとするのくいつまでかつのつひかくしのよしあるもの
巻十二 鵜のなくせくはひたきのよ
いそねよ中てかさねるやてハおしおくもいのぬひてねくこひわてもかも
ちちやびこちのわらみるやきこせるおもひいのちものるはやがつる

かもがはの乃もせあつたこのちもおかしいまハわれハいたるくるびにも
ねらちねのはのかよこのてゆこもふさいかなることをもかは
此ではいた人麿の歌集の弁よいつ
くれたるねのやしかのこゝろもおもふれさるたれハもれもいやめつても
うやぞさえりくハつみのすなふたつてこのやしもそこおもるこひてるかも
かふこのくにかのハおもひえくいひとのこりおちこたまくのてひてもちふ
くれちるね乃もちてえりくみちらぞなよううおきてわれやのうつしきこゆそこうさん
たのすぶまのやへぶりかくつたるのみなおもふのそやもそてわつかうむ
もちちやぶるかえのいのちもやえぬへしいてまへてわのれのめらしたぐれ
このしかくにかのハおやはもてわきつゆのわのてえむらへハきそうてたく
わぎこもころよおもふやましとるこきてるのなるふすのたつねのわれえつてのかくん

ちつせうはなれやこけはやせむむきひちわでてにのびや、かさひきこはも
あはれやなのはながきぬうのみごとなきこひやややむおもむき
うさごおるおきみれわたしうるなをのゆくすゑつはいつのこともく
なとてるあらゆるこゝろのけなひさきこえゆくしもあわれなわで
わしひきこのやなどらのたみれおかくしらなきかれなむ
やなしろのはなくろもあまうるおそくたむなしきれいはるあひの
くれならのあはれたるこゑんもわさらのはおひろしろきよみるわ
あらためれいはきら乃こゝろもあさはのまおひてゆまあいんもみかし
なのづさゆみむきてけるべぬなどらみやこびらよものとおもひのね
みちちねのちくこのよこのなびごきなけしせくるあるかなにびて
いそのかさみるのたのはしらくよいはむかなつらむうるぶふなうける

なのしびきこのやなまあ、つるつきまきとしひくはいひくはなかれと
しのぐなるわかめるかはのきぬれなみなたつくもきこえはなかも
うわやなれやなしつとらえゆくみかはのえさしれくまでもなかつよ
みのあきてるかつばのたのなりしだのあれはなきうるおでひきてきて
とかつひでのあらのいなままさもとらのたきてもねてもきこえして
あし、ゆくかなのたれとのたとこのこときてつかうれしこひてきるかも
さしひのくるえのくまがはまいなとめてあるさらんしのくはらきん
おかはめらむたまつていくにかとやうきもしらなそでのもあのかなやさん
題しらず
なきむくのあなまのやなまくもおつわめはられもわれつまへし
此哥は人のよくしるところなる歌なり

巻十六 けがからぬえのくりゆくしりしちぎるちぎりかへくれどきこえずきこえぬ

雑歌

巻一 十市皇女伊勢大神宮にまうでたまふ時波多横山の巌をみてよめる　吹芡刀自

河 かはのへのゆついはむらにくさむさずつねにもがもなとこをとめにて

麻績王伊良虞島に流されける時の人かなしみてよめる歌

うちそをおみのおほきみあまなれやいらごがしまのたまもかりをす

これをきゝてかなしみてこたへよめる歌　麻績王

うつせみのいのちををしみなみにぬれいらごのしまのたまもかりはむ

明日香の宮より藤原の宮にうつりまして後

志貴皇子のよみたまふ

たをやめのそでふきかへすあすかかぜみやこをとほみいたづらにふく

巻三 大網公人主宴吟歌

すまのあまのしほやききぬのふぢごろもまどほにしあればいまだきなれず

天皇雷岳に遊ますときよめる　人麻呂

おほきみはかみにしませばあまくものいかづちのうへにいほりせるかも

詔をうけてよめる歌　長忌寸意吉麻呂

おほみやのうちまできこゆあびきすとあごとゝのふるあまのよびこゑ

長皇子猟路池に遊ます時よめる　人麻呂

おほきみはかみにしませばまきのたつあらやまなかにうみをなすかも

羇旅

あふみのうみゆふなみちどりながなけばこゝろもしのにいにしへおもほゆ

あをによしならのみやこはさくはなのにほふがごとくいまさかりなり　大宰少弐小野老朝臣

よのなかをなにゝたとへむあさびらきこぎいにしふねのあとなきがごと　沙弥満誓

芳野にてよめる歌　湯原王

よしのなるなつみのかはのかはよどにかもぞなくなるやまかげにして

故太政大臣藤原家の山池をよめる　赤人

いにしへのふるきつゝみはとしふかみいけのなぎさにみくさおひにけり

巻五

松浦河に遊て贈答の歌

たましまのこのかはのうへにいへはあれどきみをやさしみあらはさずありき

此歌は娘子らが蓬客等の歌にこたふる歌也

蓬客等がさらに贈る歌

まつらがはかはのせひかりあゆつるとたゝせるいもがものすそぬれぬ

とほつひとまつらのかはにわかゆつるいもがたもとをわれこそまかめ

娘子等がまたこたふる歌　一

わかゆつるまつらのかはのかはなみのなみにしもはゞわれこひめやも

はるさればわぎへのさとのかはとにはあゆこさばしるきみまちがてに

まつらがはなゝせのよどはよどむともわれはよどまずきみをしまたむ

領巾麾嶺をよめる

ちかひ[illegible]つゝきらびめつゝひよ[illegible]かしらおつるやまの
ちなげゝのおちゆくふねを[illegible]
わか[illegible]めよいはよくとびさらびめがれし[illegible]
おもひきのよ　　　　三[illegible]王

あるざかるわれよいてせちのひつゝみやこのて[illegible]
病あつしくて[illegible]よみる　　　隠居

卅六　京よよる時姫子かおよみける
[illegible]

大宰帥大伴ノ

[illegible]

藤原宗于[illegible]使[illegible]
高橋連[illegible]

[illegible]

[illegible]大[illegible]

家[illegible]

[illegible]
葛井連広成

わがやどの[illegible]
[illegible]門部王

かおて[illegible]

天皇高圓野に狩したまふ時むさゝびをとらへてたてまつれる
さゝげたる歌　　　大伴坂上郎女
ますらをのたかまとやまにせめたればさとにおりくるむざさびぞこれ
美濃の國多藝の行宮にてよめる　　　大伴宿禰東人
いにしへゆ人のいひくるおいびとのわかゆといふみづぞなにおふたきのせ
ならの京乃あれたるをかなしみてよめる
くれなゐにふかくそみにしこゝろかもならのみやこにとしのへぬべき
よのなかをつねなきものといまぞしるならのみやこのうつろふみれば　　　よみ人しらず
久迩の新京を讃る歌
いづみがはゆくせのみづのたえばこそおほみやところうつろひゆかめ
をとめらがうみをかくといふかせのやまときしゆければみやことなりぬ
かせのやまこだちをしげみあさゝらずきなきとよもすうぐひすのこゑ
此三首は田邊福麻呂歌集の中にあり
巻七　天をよめる
あめのうみにくものなみたちつきのふねほしのはやしにこぎかくるみゆ
此の歌も人麻呂歌集の中にいづ
月をよめる
ゆぎかくるとものをひろきおほともにくにさかえんとつきはてるらし
山をよめる
あなしがはかはなみたちぬまきむくのゆづきのやまにくもゐたつらし

此歌ハ人麿が歌集の中ニ出

かすへのうらハまつゐて　わきもこもえしくちわぬおやおかくや

けりとみゆる

おもそこのみのきのやまおひもそるかたたふぢなのはのさやかさ

ありせばたのかすこゑのせくろへこゑでひちさるおみののさやかさ

葉ぞよみあれ

かすへつあやらん花も　わのぶろくうわのひかりよかはしとりらん

ゆくかはのせをぶふし花ののやこふねぶしふれてあるのひぶらハ

此二首も人麿が歌集の中ニ出つ

こけりとみゆる

こよしのおあをしねがらくのこゑもしろされおわうむたてるる

草をよめる

いもがあとわがかよひぢのさゝのはのみだれかはしもやのよふ

ある時と相わひてよめる

きよきせのあらびやまのまつかぜにあらしかぜぞしのびのさと

冬をとよめる

きみがはまおくるるみかたにいわしるとしかてそもわびいやうハめぐる

此三首同巻の中ニ出

巻十　わびつゝつゆしほかるかかぞをもゆかるびやまさるふけなく

巻九　此歌も同巻の中ニ出ルもある

まきのやのふねのやまにわまのうべよさゝかさかねよれわにたれ

おもつらすふたながちのいてよふるあよふくつをのさよゆ

題しらず　　　　挑な

さくたのみのえしやまゝのぞのうしみけばつわもゝわちめてでかへるらん

巻十五 花のちらせし思ひそのよ　　中院前右宅守

うぐひすのなれもそらばかりつゝよもちゝさくらんなしにもあらし

巻十六 為嗣王像奥にやさしくある何ぞの家なしのとある歌

わさうやてかぐさへゆるやるのおの、ほかそこにもかはもくらい

小督王前よ琴をとらしく詠める歌

ゆかしけるのあめしたもれかもつのゝとだれかれのおもうつゆかね

倭人を詠るうし、　　修士清常行文大夫

なのりやまんこのてがしはふくぶかみのくにしむらひのさる

前中の園の歌　　よみ人しらず

いやひとおのれかをかびおくとてものかれひくれこらぬゆめかる

巻十七 正月一日のうちに九条殿に立つりてわく大ふ守部に参る

了け気を入る時詔よしりてとある歌　　紀友則男

やるめかのひろてしえびちそつひきのぶなみしゆかのすれんが

巻十八 太上皇難波の宮よおわしまし時よとをすまんとよめる

九人臣構お仰様

やをそよしんしのたてるたこのそりしとおやきとのかれなむとおてまでかび

菅野のうんの家よ妻はわの歌　　よみ人しらず

わのゝかれやそうちひしらしのかけとゝめくてつゝのそへんかん

史生尾張少郎とたまし寛　　家持

くれちおはうへろよりのそでつゝぱそのちもかきめ

越中國掾久米朝臣廣縄朝集使に附て京に入ける後
に還る時よめる

こぞのあきあひ見しまゝにけふみれば　おもやめづらし　みやこがたびと

巻十九　遥に江をのぼる船人のうたをきゝてよめる

あさどこにきけばはるけしいみづがは　あさこぎしつゝ　うたふふなびと

勇士の名を振ことを慕ふ歌　家持

ますらをはなをしたつべし　のちのよにきゝつぐひとも　かたりつぐがね

布勢水海に遊覧る時たこの浦に舟とめて、藤花をみて
よめる

たごのうらのそこさへにほふふぢなみを　かざしてゆかん　みぬひとのため

内蔵忌寸縄万呂

壬申の年乃乱たひらげる後乃歌

大将軍贈右大臣大伴卿

おほきみはかみにしませば　あかごまのはらばふたゐを　みやことなしつ

よみ人しらず

おほきみはかみにしませば　みづとりのすだくみぬまを　みやことなしつ

新嘗會のとよのあかりに詔にこたへてよめる

大和國守藤原永手朝臣

そでたれていざわがそのにうぐひすの　こづたひちらす　うめのはなみに

天平五年高圓野にのぼりてよめる

家持

をみなへしあきはぎしのぎ　さをしかのつゆわけなかん　たかまとののぞ

宴にあそべるときよめるうた

散位馬史國人

まくらのおきさるがはにたえぬべききこりかくしよそふつきめやも

題しらず　家持

ふなぎほふほりえのかはのみなぎはにきゐつゝなくはみやこどりかも

物色のうつろふを悲しみてよめる歌

さくはなはうつろふときありあしひきのやますがのねしながくはありけり

うちのやらおわかうらあるか　内相藤原朝臣

いざこどもたはわざなせそあめつちのかためしくにぞやまとしまねは

治部少輔大原今城真人宅にて宴する歌　家持

つきよめばいまだふゆなりしかすがにかすみたなびくはるたちぬとか

巻十四　東歌

下総国のうた

かつしかのまゝのうらまをこぐふねのふなびとさわくなみたつらしも

上野国の歌

いかほかぜふくひふかぬひありといへどあがこひのみしときなかりけり

旅別

巻一　題しらず　額田女王

あきのゝのみくさかりふきやどれりしうぢのみやこのかりいほしおもほゆ

にぎたづにふなのりせんとつきまてばしほもかなひぬいまはこぎいでな

中皇女命紀伊のゆにゆきましゝ時のみうた

ぞみだるゝもわがよも志のぶやいかにしのぶのみだれかはねとかいざむすびてな

天智天皇蒲生野遊猟しける時よめる　額田女王

あかねさすむらさきのゆき志めのゆきのもりはみずやきみがそでふる

天武天皇東宮にます時の御こたへ

むらさきのにほへるいもをにくゝあらばひとづまゆゑにわれこひめやも

伊勢の國にみゆきありける時宮こにとゞまりてよめる　人麿

あごのうらにふなのりすらむをとめらがたまものすそにしほみつらむか

くしろつくたふしのさきにけふもかもおほみや人のたまもかるらむ

志ほさゐにいらごのしまべこぐふねにいもゝのるらむあらきしまわを

持統天皇紀伊の國にます時よめる　坂門人足

こせやまのつらつらつばきつらつらにみつゝしのばなこせのはるのを

おなじみゆきの先に紀の國にます時のうた　奥麿

ひくまのにほふはりはらいりみだれころもにほはせたびのしるしに

誉謝女王

ながらふるつまふくかぜのさむきよにわがせのきみはひとりかぬらむ

これもおなじくよめる　舎人娘子

ますらをのさつやたばさみたちむかひいるまとかたはみるにさやけし

日へらしまなをなつかしくおもひてよめる

いざこどもはやもやまとへおほとものみつのはままつまちこひぬらむ　憶良

難波に幸す時志貴皇子の御歌

あしべゆくかものはがひにしもふりてさむきゆふべはやまとしおもほゆ

持統天皇芳野に幸す時　高市連黒人

やまとにはなきてかくらむよぶこどりきさのなかやまよびぞこゆなる

文武天皇紀伊の国に幸す時のうた　長屋王

うぢまやまあさかぜさむしたびにしてころもかすべきいももあらなくに

巻三　筑紫につかはさるゝ時の歌　長田王

はやひとのさつまのせとをくもゐなすとほくもわれはけふみつるかも

題しらず　人麿

たまもかるみぬめをすぎてなつくさののしまがさきにふねちかづきぬ

あはぢののしまのさき乃はまかぜにいもがむすびしひもふきかへす

あまざかるひなのながぢゆこひくればあかしのとよりやまとしまみゆ

近江国よりのぼりくる時宇治河乃ほとりにいたりてよめる

もののふのやそうぢがはのあじろぎにいさよふなみのゆくへしらずも

題しらず　黒人

さくらだへたづなきわたるあゆちがたしほひにけらしたづなきわたる

しはつやまうちこえみればかさぬひのしまこぎかくるたなゝしをぶね

石川少郎

しかのあまはめかりしほやきいとまなみくしげのをぐしとりもみなくに

夫木集人の歌よみける中に　忠人の集

あしびきの山のあらしやゆくさくら花をこころのまゝにちらすな

題しらず　忠人

さゝなみのえのえにきてよるさへのなきさのきよらにはへりけりそてにかゝるも

志賀に幸す時よめる　穂積朝臣老

わがいのちしまさきくあらばまたもみんしがのおほつによするしらなみ

題しらず　角兄麻呂

すみのえのきしのまつがねつらつらもみつゝわがのゝはじめしよりはすゑはつる

上野の国のつかさ下る時駿河の国浄見崎にてよめる

田口益人大夫

ひるみれどあかぬたごのうらおほきみのみことかしこみよるみつるかな

題しらず　弁基

まつちやまゆふこえゆきていほさきのすみだかはらにひとりかもねむ

つくしへ下る時海路にてよめる　人麿

なぐはしきいなみのうみのおきつなみちへにかくれぬやまとしまねは

巻四　夫のいせの国に行ける時によめる　碁檀越の妻

かむかぜのいせのはまをぎをりふせてたびねやすらむあらきはまべに

駅使に餞する歌　山口忌寸若麻呂

すはうなるいはくにやまをこえん日はたむけよくせよあらしそのみち

巻六　芳野に幸せし時によめる　笠朝臣金村

みなひとのいのちもわれもみよしのゝたきのときはのつねならぬかも

たかまとに幸せし時によめる　赤人

あすならばかはのせごとにまくらぬしてあにはのふねのあとなかりけり

幸紀伊国時歌

まつがくれわのうきさくればさのしかもやまとのぶるなくまのうみ

香椎浦にてよめる　大宰帥大伴卿

いざこどもかしひのかたにしろたへのそでさへぬれてあさなつみてん

幸難波宮時の歌　船王

まゆのごとくもゐにみゆるあはのやまかけてこぐふねとまりしらずも

聖武天皇の御歌

いもにこひあごのまつばらみわたせばしほひのかたにたづなきわたる

巻七旅にてよめる歌　よみ人しらず

あられふるかしまのさきをなみたかみすぎてやゆかんこひしきものを

きりふけそくかやまえごこくらうるるうてふあからすのしのきけやさかな

はるかあらばころひはゆくしまのゑみしまはふるひとつれ

おかくものみつおほくべくらうさつし経るゆくへさそれ

なのはなぐさのひよろりてこたちせいおかうのしらつるるなる

題しらず

わさびのうらなのひよまのはなかくへどうわたかはね

あさでひくられのかくのおくらへまふともそけるみおほむ

なささくてよくらかこころのはるをれてまさもさそののしるる

あびききうおやさしんのしるるさらおわうさうる

おかうみよあらしれふきてたまがねおものふおもねたるる

せみやさふたにいむのふるいまみやたこゆきてやしさははら

きのくにのちかいのみちふかいでこれがおものゝ[illegible]しびものとおもみゆ
とこのみぶねおそくこぎくるしいまづるおほみおくるよ[illegible]たつのけるるゝ
おかしきふかきこゝろしらむおしへしかおかしのてもるみいみそさわかぬ
わかものうらばおやのこゝろなさぞおそさゆくしきのみはのべありけるやそのやう
たのみにうるまむつくなさとたてまつておもふらうずましきゆくへやさくし
かざしやのうらのこゝろおもひとおもふくふねのふねしびしやあわくたふらしき
あさまていのひかのくふかくしうるものもとのゝうらふらるみてけるなかむ
[illegible]おらくのおなるはるゝのてくらまぐしあてかだてくしまさてもるまかたなる
志かるやみけまおりまうれば御しゆきるゝのよやうらんとじゆくれと
かみなかしいのまかくらるゝゆらのゝくらねやまくべきらかやうしてうき
ぬばしたのゝくるゝのことやさとおもふてやうしてうゆゆれるふかき

ときあらこのはなのみをゆふのやまくれのくらし山のわたるかな
志このおとの志やくるすかかくいるみへのびはやするらむ
題しらず
ころしゆくるひきさまてかわさこえるかくのよおもひ
巻九 [illegible] 紀伊の国 [illegible]の歌
あさがすみせふしこゝろかぞびしてひとやまきみなかむ
[illegible] 紀伊の国 [illegible]
いかのしあわれしくりくしおとるへちるしたるらぬせしおそる志きか
くるしがうまやしのらるあせくれたるのたるまてくしひとゆくかな
やさしいきこえまゆくらわかやがのゝくらぶかわしきゆりかせるとき
あまやしまへゆくきこえみがてうてやまかゆらしむかしてかめるまね

さるゑゆそくとかめる
たうしろのおもかはちるをはさうげどわかきさんに人なしやどかなりそ
守琉舟主人よかめる
おかくろのいくえるたかいあびとのつもかるかゝくらし
魁しらは
るつまそくおれかくしそ志るかゞよわのぶおちくんとちしちおし
孝田藏
庵主
いかし人のかしこきひとのおもびんよしのかはくれとおもねかし
守人舟
やましおのにそくのそのはてゝくつやまみがやまかみに
小瓢

たゞしろのみなもとぞまきてとかつききらいはらこぞら
らし曝くまそくよめる
武部大條
やまさうて志てゆふたれふなかただきもつくてののなといはおね
大祢大夫むかしありける時三輪ののきゝつてひて京
よみ人志らは
るすまく
おのれのそてれいやらひむたるがひにたまびくやすくきさくが
えいら
発九
大祢太夫つくしの國に侍る時よめる
阿部大夫
おくれのそてれいやらひんにゐみのわきはまそくついろもこゝ
石部大夫京にありけるとおくる歌
播磨低る

きみなくばなぞみよそほはむくしげなるつげのをぐしもとらんともおもはず

遣唐使の舟難波よりいでける時母の子におくる歌

たびとのやどりせむのに志もふらばわがこはぐくめあまのたづむら

巻十二 題志らず　よみ人しらず

ほとゝぎすとびはたのうらにしくなみのしくしくきみをみんよしもがな

くさかげのあらゐのさきのかさしまをみつゝかきみがやまぢこゆらむ

すみのえのきしにむかへるあはぢしまあはれときみをいはぬひはなし

巻十三 あふさかをうちいでゝみればあふみのうみしらゆふばなになみたちわたる

巻十四 防人の歌

あしのはにゆふぎりたちてかもがねのさむきゆふべしなをばしのばん

巻十五 新羅よ遣せる使人らがよめる歌 於二風早浦

わがゆゑにいもなげくらしかぜはやのうらのおきべにきりたなびけり

船よのりて海よ入る路よてよめる歌

ぬばたまのよはあけぬらしたまのうらにあさりするたづなきわたるなり

あごのうらにふなのりすらむをとめらがあかものすそにしほみつらむか

わたつみのうみにいでたるしかまがはたえんひにこそあがこひやまめ

安藝國長門島よ船とまりて磯邊よてよめる歌

大石蓑麿

いはばしるたぎもとゞろになくせみのこゑをしきけばみやこしおもほゆ

よみ人志らず

やまがはのきよきかはせにあそべどもならのみやこはわすれかねつも

わがいのちをながとのしまのこまつばらいくよをへてかかむさびわたる

長門浦より舩出する夜月をみてよめる歌
やすのはよつきからさけはあかるあたりのかりしびかきつゞきよ
われのこやとすねかいぐとみまへ斗だわきへのこくはかくらのみちなり

周防國玖珂郡麻里布の浦をゆく時よめる歌
いへびとはかへりはやこといはひしまいはひまつらむたびゆくわれを

大島の鳴門をすぎて二夜を経て後追てよめる歌　田邊秋庭
これやこのなにおふなるとのうづしほにたまもかるとふあまをとめども

海邊にて月をみてよめる　土師稲足
かしまづるいつかみるなきやまとなるやまとしまねをこひわたりなん
ゆきかへりわかせむしゝにはせてこがうくはしびさんけゆさんかもむ

引津のとまりに舩をつなぎ時よめる歌
あきさらばかへりなんと思ひいつるまにもしなきものをやこまにもみぢせん

肥前國松浦郡狛島のとまりに舩泊ける夜よめる歌
たらしひめみふねはてけむまつらのうみいもがまつべきつきはへにつゝ

巻十七 大宰帥大伴卿大納言に任られ京へ上る時傔従人等
海路より上るとてよめる
たまつしまみれどもあかずいかにしてつゝみもちゆかむみぬ人のため

布勢の水海にあそびてよめる　家持
ふせのうみのおきつしらなみありがよひいやとしのはにみつゝしのばむ

巻十九 入唐大使藤原清河の歌

かすがのにいつくみもろのうめのはなさきてありまてかへりくるまで

越中守より少納言にうつされし時おもひをのべて朝集使
掾久米廣繩にあたふる歌　家持

いはせのにあきはぎしのぎうまなめてはつとがりだにせずやわかれん

衛門督大伴古慈悲宿祢家にて入唐副使胡麻呂宿祢等を
餞する時によめる　多治比眞人鷹主

からくにゆきたらはしてかへりこむますらたけをにみきたてまつる

巻二十題しらず

なにはとをこぎでてみればかみさぶるいこまたかねにくもぞたなびく　梁田郡上丁大田部三成

此の年下野國の防人部領使大目息長眞人國島が
進むる歌の中にいつ

防人がためにおもひをのべてよめる歌　家持

うなばらにかすみたなびきたづがねのかなしきよひはくにべしおもほゆ

讃岐なる安宿王等出雲の掾安宿奈杼麻呂の家にうたげする
うた　安宿奈杼麻呂

おほきみのみことかしこみおほのうらをそがひにみつつみやこへのぼる

大原今城眞人の宅にて因幡守大伴宿祢家持を餞する時
の歌　家持

あきかぜのすゑふきなびくはぎのはなともにかざさずあひかわかれん

賀

巻八 志貴皇子のよろこびの御歌

いはばしるたるみのうへのさわらびのもえいづるはるになりにけるかも

巻十八 元正天皇左大臣橘の宅におはしましてとよのあかり

しめし時のしるしにまうする歌 家持

おほきみはときはにまさむたちばなのとのゝたちばなひたてりにして

橘宿禰奈良麻呂 せたまへとくにかへしてしらめる

もゝろぎのこゝのえんとにつるちゝるまつのくやふこのねふれ

挽歌

巻二 有間皇子みづから傷て松の枝を結び給ふ御歌

いはしろのはままつがえをひきむすびまさきくあらばまたかへりみむ

いへにあればけにもるいひをくさまくらたびにしあればしひのはにもる

天智天皇崩給ひし時よみ給ふ歌

石川夫人

さゝなみのおほやまもりはたがためかやまにしめゆふきみもあらなくに

巻三 大津皇子つみなはれ給ひし時磐余池にてなみだを

ながして

もゝづたふいはれのいけになくかもをけふのみみてやくもがくれなむ

巻七 題しらず

よみ人しらず

いにしへやありけむわれもこふれていもにはあはずもねるかなしも

巻九 柿本人麻呂ことばしてよめる

ふいつかゝのたかとのこゝろきなるかなぞこゝろの

かつしかのまゝのゐをみれば たちならしみづくましけん てごなしおもほゆ 省

此歌ハ高橋連蟲麿之歌集の中ニいづ

旋頭歌

巻七 題しらず　よみ人志らず

あをみづらよさみのはらにひともあはぬかも いはゞしるあふみのあがたのものがたりせん

わたのそこおきつたまものなのりそのはな いもとわれとこゝにしありとなのりそのはな

このをかにくさかるわらはしかなかりそね(とのこ) ありつゝもきみがきまさむみまくさにせむ

あられふりとほつあふみのあとかはやなぎ かれども(つかつせど) またもおふちふあとかはやなぎ

此四首人麿歌集の中ニ出

かしらのたるゝからにやあらん つぎのすゑいつゝやびともの入しきのうたよりおこりて

萬葉集佳調上巻

萬葉集佳調下巻

長歌部

相聞

巻二　石見のくにより妻にわかれてのぼりくる時によめる歌　　人麿

いはみの海つのうらをうらなしと人こそみらめかたなしと
ひとこそみらめよしゑやしうら（浦）はなくともよしゑやしかたはなくとも
いさなとりうみべをさしてにきたづのありそのうへにかあをなる
たまもおきつもあさはふる（羽振）かぜこそよせめゆふはふるなみこそ
きよれなみのむた（共）かよりかくよるたまもなすよりねしいもを
つゆしものおき（置）てしくればこのみちのやそくまごとによろづたび

かへりみすれど。いやとほに。さとはさかりぬ。いやたかに。やまもこえきぬ。
なつくさの。おもひしなえて。しぬぶらん。いもがかどみん。なびけ
このやま。

反歌

いはみのや。たかつのやまの。このまより。わがふるそでを。いもみつらんか

つのさはふ。いはみのうみの。ことさへぐ。からのさきなる。いくり（海石）にぞ。ふかみるおふる。
ありそにぞ。たまもはおふる。たまもなす。なびきね
しこを。ふかみるの。ふかめておもへど。さぬるよは。いくらもあらず。はふつ
たの。わかれしくれば。きもむかふ。こゝろをいたみ。おもひつゝ。かへりみ
すれど。おほぶねの。わたりのやまの。もみぢばの。ちりのまが
いもがそで。さやにもみえず。つまごもる。やかみのやまの。くもまより。
わたらふつきの。をしけども。かくろひ（隠）くれば。あまつたふ。いりひさ
しぬれ。ますらをと。おもへるわれも。しきたへの。ころものそでは。
とほりてぬれぬ。

巻四 筑紫の國にくだる時よめる　丹比真人笠麻呂

臣女（たをやめ）のくしげにのれる。かゞみなす。みつのはまべに。さにつらふ。
ひもときさけず。わぎもこに。こひつゝをれば。あけぐれの。あさぎりごもり。
なくたづの。ねのみしなかゆ。わがこふる。ちへのひとへも。なぐさもる。
こゝろもありやと。いへのあたり。わがたちみれば。あをはたの。
かづらきやまに。たなびける。しらくもがくる。あまざかる。ひなのく
にべに。たゞむかふ。あはぢをすぎ（過）て。あはしまを。そがひにみつゝ。あさ

たかさみかこのこゑらびゆしたすぶかちのしつゝなみの上へとい ゆき
さぐてみいたのあとにゆきかりかてぃちびつぶうしうえとさとさて
ともしりのたゝづさひゆくばいへのしたおつるのうへはしるらしき 浦方
きてはおひるらのかそしなかのしいゆふのつむさまるなん 茂
紀伊のくにすますばえしの人よおくんゑるよ娘るふ
おくるへらりくとある 全村
もとめろざのいてかしのまるよ あのくるれやそとりのさとゐでゆさし（おかきこ）
くつくしつるへおるとふやかるのそちにたらだしてきつねびと
こつはおさらしるすよいるるるあつたやなこゆるむしきつみにし
みぐのちりらふこつむつりしきわきとおあめびくさてかくる
くびとらゆのさ みそひつきえかわるむとおやくもかつきせし

志のひがよからへえわるるのべたのせこがゆきのはあふく おれんむ
ちるび帰るへどたをやめのあがこふしおれにらもかあのとゑ
わるへとりひやしむまそべときららもてつるつく

雑歌

寿一 浪速の國安芸郡よ存る付山くさくらある

軍王

かすこ此れるのきけるびのくれふなる わづきしもちるびむくき
かのふろとりるみぬえこひめうしなるとれば浪るのさき
かそのうらしくとかつのみやがおかきこのいでよしのやますし
乃かぜんれ もはうさる あかこゑあでよおきらひよかつるひわれば

ますらをと、おもへるわれも。くさまくら。たびにしあれば。おもひやる。
たづきをしらに。あみのうらの。あまをとめらが。やくしほの。
おもひぞやくる。わがしたごゝろ。

天武天皇乃大みうた

みよしのゝ。みゝがのみねに。ときなくぞ。ゆきはふりける。まなくぞ。
あめはふりける。そのゆきの。ときなきがごと。そのあめの。まなきがごと。
くまもおちず。おもひつゝぞくる。そのやまみちを。

あふみのあれたる都をすぐるとき　人麿

たまだすき。うねびのやまの。かしはらの。ひじりのみよゆ。あれまし
し。かみのことごと。つがのきの。いやつぎ〳〵に。あめのしたしらし
めしゝを。そらにみつ。やまとをおきて。あをによし。ならやまを
こえて。いかさまに。おもほしめせか。あまざかる。ひなにはあれど。
いはばしる。あふみのくにの。さゝなみの。おほつのみやに。あめの
した。しらしめしけむ。すめろぎの。かみのみことの。おほみやは。
こゝときけども。おほとのは。こゝといへども。はるくさしげく
おひたる。かすみたち。はるびのきれる。もゝしきの。おほみ
やどころ。みればかなしも。

反歌

さゝなみの。しがのからさき。さきくあれど。おほみやびとの。ふねまちかねつ。
さゝなみの。しがの（一云ひらの）おほわだ。よどむとも。むかしのひとに。またもあはめやも（一云あはむともへや）
ふるき都の宮をすぎし時よめる

やまみしらがおほやけところのそこつしきをおほめのつまくらにいしも
さはふあれどもやなみはのすゝききかすらとにこてろをとよしのく
うたろくれちる散みおもれのみなべはらやばしらぶらしそらせ
りしそふれておほらやびていふねなるしくおきかはなちらふれる
かひゆかはころるすいのこのもろたゆるこそもくこのやなろいや
たのらしいたびしる。わがふれやこいみせでおのぬかし。

反哥

られどおのわよしのかはろとこなぬのたゆることもなくもるかへ
やまみしらがみかさとかくなかくのこそひせてどもしろがけ
しこぶかすらにたすのとさうしもすのぼりくなくし

されはたゝなはるあをがきやまのやまつみのまつりる
はるかぜしもちおきたてばもみぢかざせりゆくゝのはのかもしおほ
うるはつのへるつるものがつせふらかはとたてゝ志きつけしぞくし
わしやまのはもなりてつゝまるかみのしらのし。

[illegible]安[illegible]の[illegible]やまとうたはしめる

やまとしらがおほやけすたのひかる。そのしこのしきゝのまつかきこひ
やまとふらしうはらやあとおそろてさかりのものつせみやまい
なさのうれしおもきやうちをいとうかねのまほりおしるすべき
もつのおやこゝえてなしてかそうしのゆかすふられにゆさる。
わきのおかろよはつくるもをきたのくおしかうつさまくろ
たびやまゆせひいふし（へなすまひて。

短歌

あきのゝにやどるたびびとうちなびきいもぬらめやもいにしへおもふに

まくさかるあらのにはあれどもみぢばのすぎにしきみがかたみとぞこし

ひむがしののにかぎろひのたつみえてかへりみすればつきかたぶきぬ

ひなみしのみこのみことのうまなめてみかりたゝしゝときはきむかふ

藤原の宮をたてる民がよめる歌

やすみしゝわがおほきみたかてらすひのみこあらたへのふぢはらがうへにをすくにをめしたまはむとみあらかはたかしらさむとかむながらおもほすなへにあめつちもよりてあれこそいはばしるあふみのくにのころもでのたなかみやまのまきさくひのつまでをもののふのやそうぢがはにたまもなすうかべながせれそをとるとさわくみたみもいへわすれみもたなしらずかもじものみづにうきゐてわがつくるひのみかどにしらぬくによしこせぢよりわがくにはとこよにならむあやおへるくすしきかめもあらたよといづみのかはにもちこせるまきのつまでをもゝたらずいかだにつくりのぼすらむいそはくみればかむからならし。

藤原宮の御井歌　よみ人しらず

やすみしゝわごおほきみたかてらすひのみこあらたへのふぢゐがはらにおほみかどはじめたまひてはにやすのつゝみのうへにありたゝしめしたまへばやまとのあをかぐやまはひのたてのおほみかどにはるやまとしみさびたてりうねびのこのみづやまはひのよこのおほみかどにみづやまとやまさびいますみゝなしのあをすがやまはそとものおほみかどに

ものおかしかりけるよりしなめかくさひたてかたなくしらしめしやすらは
かくしものおかしみつからくしあまかりけくあるまるたのしやおわれ
こかくおわりしやしのかくのふりこそなくてへまつらぬふおのまかしこり

巻二　長皇子猟路池に遊ひ時よめる　人麿

やすみしゝわがおほきみたかひかるひのみこがむかしのこゝろなくてうかゝへてふか
たゝせるわかこもかりぢのをのにしゝこそはいはひをろがめうづらこそいはひもとほれ
しゝじものいはひをろがみうづらなすいはひもとほりかしこみとつかへまつりて
ひさかたのあまみるごとくまそかゞみあふぎてみれどはるくさのいやめづらしきわが
おほきみかも

反歌

さしわたすはかりふしてあせはよそのくもおしやるなるのふさしとる
おかきに

不尽の山をとりてよめる　赤人

わめつちのわかれしときゆかむさびてたのしくよろしきするが
なるふじのたかねをあまのはらふりさけみれはわたるひの
かげもかくろひてるつきのひかりもみえすしらくもいゆ
きはゞかりときしくぞゆきはふりけるかたりつぎいひつぎゆかむ
ふじのたかねは

反歌

たごのうらゆうちでゝみれはましろにそふじのたかねにゆきはふりける

不尽の山をよめる　よみ人しらず

なまよみの。かひのくに。うちよする。するがのくにと。こちごちの。くにのみ
なかゆ。いでたてる。ふじのたかねは。あまぐもゝ。いゆきはゞかり。とぶとりも。
とびものぼらず。もゆるひを。ゆきもちけち。ふるゆきを。ひもちけちつゝ。
いひもえず。なづけもしらず。くすしくも。いますかみかも。せのうみと。なづけ
てあるも。そのやまの。つゝめるうみぞ。ふじ
かはと。ひとのわたるも。そのやまの。みづのたぎちぞ。ひの
もとの。やまとのくにの。しづめとも。いますかみかも。たからとも。なれ
るやまかも。するがなる。ふじのたかねは。みれどあかぬかも。

反歌

ふじのねに。ふりおけるゆきは。みなづきの。もちにけぬれば。そのよふりけり
ふじのねを。たかみかしこみ。あまぐもゝ。いゆきはゞかり。たなびくものを

此三首ハ萬葉集の中に入

神岳にのぼりてよめる　赤人

みもろの。かみなびやまに。いほえさし。しゞにおひたる。つがのきの。いや
つぎつぎに。たまかづら。たゆることなく。ありつゝも。やまずかよはむ。あすかの
ふるきみやこは。やまたかみ。かはとほしろし。はるのひは。やましみがほし。あきのよは。
かはしさやけし。あさぐもに。たづはみだれ。ゆふぎりに。かはづはさわく。みるごとに。
ねのみしなかゆ。いにしへおもへば。

反歌

あすかがは。かはよどさらず。たつきりの。おもひすぐべき。こひにあらなくに

角麻呂の津にして舟にのる時よめる

さしのこゑつゝぬのゝそでゆかゆかしかねはてのおもわきおかんしにさみし
とらまうらみちつゞいでおへぎつまがこゝちゆたかにさむらひとのたゆ
ひがしにおるをとめなやくなからくさてるたびみし
あれば、いとましてゐるちるしなよげるつてのてよすかしこ
ふるたちてさがなくして心めびつやるとしよねと。

蕪村

巻三 羇旅のうた

よみ人しらず

わかれにはおやしきものゝおもひしるなのるたくおさむきて
なみだにながれぬくらしおもへちつきおのしのぶゆはいふされば
しらずとこひしめおもひれば心とおびさしめをきるおのだよふく
かしこにおそくしるいてかくゆめてはつかしたいのなみおゝむし

まつしまやいのねのそでねがたびのあさのあきしおなめ
さもしらぬは ふもとちかみは ふもとこそぐらしいざこぞしおへてこゝろでんぶはしもしらぬ

巻五 述懐石をとゞめる

懐旧

かくるくはおやよかしこしたゝしびめかたのみやこかくくにて
むかしひとげてこゝろとしつめしてすでにもとしてげるゝ 取
しかしはしてすまるひふかれのいとゞものひゝふもしめしてまひ
うれいよおいてひつぐのねてわくのそこおもふのえのあれがその
さふのはるいそてつうへおうしよいてかくしらのかゝかさ
いまひぐしこそるいまみをつゆしこすてかゝわかも。

読しらず

かよのなばひつてなくくつこゝれやまとのくにはまあがたのいつく

しきくにゞにしくなのさきはひよろこびかくらつぎゞひつぎのひかり
なのらみにけるこぐゐのなべてにこそあまねくわたりさはよろ
ちよにおはしますたのひかるみのきみがふかしきめぐみ給んでのさかゆ
おほのしらすなくしきしまいへのやまでえらひなきひろくおほ
こゞしくきみもそがわくしめぐみくさのひとつのたかきいやさか
なかめにはるせくしなよりしものへふもおほしにもかえつなわざしもいやはな
もろくのおほみかみきみがふねのへにしきてびきてなびしおほ
つらのおほきかみなるやてらしておほくにこゝろ。そこさかく
おなのこゝろゆ。このなかくにこゝろしなをしひかつてらへてか
しらふえひしへてくさしてしおほきかみなるふねのへよろ
しもかへてしきなはとぞくへしるごとし　阿庭可遠志

さをしかのおほかものかみ乃たおびみおたちてよろこおはくそむつ
こゝのくさぐくいはしてたやかつらなせ。

反歌

あかものかみ乃るつたへかもたえてわせたなかむたやかわ

巻六 芳野の離宮に幸せる時　金村

たきのへ乃みふねのやまにみづえさししゞにおひたるつがの
きのいやつぎつぎによろづよにかくしらさむみよしののおほ
つのみやはかむからかたふとくあるらむくにからかみがほしかるも
やまかはをきよみさやけみうべしかみよゆさだめけらしも。

反歌

よしのはふかくもうてしがらみさゝへきかつらのたぎつせなき
やまたのてちかゆみだれみおちらたぎりみぎのかはちはしれどわかめのこ
こらしのおちりのかはゆうかりよふたゆることなくかつらじ
たりせめのつくるゆみだれこらしのたぎのこゝろおもふとをしや

紀伊の國に幸ひはへる　赤人

やすみしゝわごおほきみのとこみやとつかへまつれるさひかのゆ
そがひにみゆるおきつしまきよきなぎさにかぜふけばしらなみさわき
しほひればたまもかりつゝかみよよりしかぞたふとき
たまつしまやま。

反歌

わかのうらにしほみちくれば潟をなみあしべをさしてたづなきわたる

題しらず

やすみしゝわごおほきみのたかしらすよしのゝみやはたゝなづく。
あをかきごもりかはなみのきよきかふちぞはるべははなさきをゝり
あきされば きりたちわたる。そのやまの いやましましに このかはの
たゆることなく もゝしきの おほみやびとは つねにかよはむ。

反歌

ぬばたまのよのふけゆけばひさきおふるきよきかはらにちどりしばなく

題志らず

やすみしゝわごおほきみはみよしのゝあきつのをのゝのゝへには
跡見すゑおきて。みやまにはいめたてわたしあさがりにしゝふみおこし
ゆふがりにとりふみたてうまなめてみかりぞたゝす。

のしげのに。

反歌

あしびきのやまにものにもみかりびとさつやたばさみみだれたるみゆ

難波の宮ニ於テ作る　金村

おしてるやなにはのくにはあしがきのふりにしさととひとみなの
おもひやすみてつれもなくありしあひだにうみをなすながら
のみやにまきばしらふとたかしきてをすくにををさめた
まへばおきつとりあぢふのはらにもののふのやそとものをは
いほりしてみやこなしたりたびにはあれども。

反歌

あまをとめたなゝしをぶねこぎづらしたびのやどりにかぢのおときこ

題しらず　車持千年

いさなとりはまべをきよみうちなびきおふるたまもにあさなぎにちへなみよせゆふなぎにいほへなみよす
へつなみのいやしくしくにつきにけにひにひにみともいまのみにあきたらめやも
しらなみのいさきめぐれるすみのえのはま。

反歌

しらなみのちへにきよするすみのえのきしのはにふににほひてゆかな

播磨の国印南野ニ於テ作る　金村

なきすみのふなせゆみゆるあはぢしまゝつほのうらにあさなぎに
たまもかりつゝゆふなぎにもしほやきつゝあまをとめ

とほきけどふゆのむらしのたのみれはでからくらそのごとくにくず
ふたつどやかのおほひたさとこでごりかかわれはでこするふねこぞ
たこたのみ。

題しらず　　　　　　赤人

やまとしがごおやまみかむなびたちまるるさるいるこの。
おかくらのはつふのしくのふきぬのゝしにおびつゝき
あさがねさとゝにしかやとひとさげするぐしぐさをなぐ
もつかくにけなとこらべにちかやくおかきのとさひさきそ
あらしきにこそこそけりける。

よし野の離宮に幸ありける

やまとしがかおかきさみのこしなよしのしのかはやまかはの
くもぞたなびくかけてやきけのそてをさきかゝらひてくれいま
とくかりなのくされはやくしかのやまのつきがのとこそこのか
そのたえはのしさりしきのおかしらやをとんやしよさきあらぬ。

反歌

かふのしまのこやまあかゝらひたちあくせるいやまかはとこし

巻八　入唐使におくる哥の　　　　金村

たまらしきかくあそぶもすくにものとふかりゆきこかくつせのか
ものそらのれはおかきさみのことかしこゆるされはたのがか
つよしふたのふはのことこのさとあかおかふおまえるのをさて
わさきこつちきみのたつらとこことすてるいはなのれゆのなら
するかまさかわさもけいくひつきことにまうしくやまつかます。

巻十七 三香のはらのにひみやこをほむる歌　境部宿禰老麿

やましろのくにのみやこははるさればはなさきををりあきされば
もみぢばにほひおばせるいづみのかはのかみつせにうち
はしわたしよどせにはうきはしわたしありがよひつかへまつらむ
よろづよまでに。

反歌

たゝなめていづみのかはのみをたえずつかへまつらむおほみやどころ

巻十九 入唐使にたまふ歌　孝謙天皇

そらみつやまとのくにはみづのうへはつちゆくごとくふねのうへは
みつのはなるけのせのそこすかたくのゆしかしつゝさゝの
えのけのおけにかへるのへなずしはさにかしつそのそゝぶ
しやしてやしゝしゝじいそのさきでこえてしよぶゝ
おくそかせたゝすにのくせひゝしくそくおくかつかせかと
のえがうし。

巻二十 やのつよさきひとし。　家持

ゑかくのおほのひときたのとほのたゝよあへりし
まあろぎのかゝのみすかもしゆくとたふそふもしまつ
こやをたえすみてへておもくめやなひらしやさとしやあそ
てゆくのおもせやなはそゝけくねさくゝそゆゆしゆかゝれ
よろしつちいやゆるがこそとよもしけなつゝろへぬえしく

はききよめ つかへまつりて あきづしま やまとのくにの かしはら
のうねびのみやに みやばしら ふとしりたてゝ あめのしたに。
しらしめしける すめろぎの あまのひつぎと つぎてくる きみの
のみよみよ かくさはぬ あかきこゝろを すめらへに きはめつくして。
つかへくる おやのつかさと ことだてゝ さづけたまへる うみのこ
のいやつぎつぎに みるひとの かたりつぎてゝ きくひとの かゞみに
せむを あたらしき きよきそのなぞ おぼろかに こゝろおもひて
むなことも おやのなたつな おほともの うぢとなにおへる ますらをのとも。
しきしまの やまとのくにゝ あきらけき なにおふとものを こゝろつとめよ
つるぎたち いよゝとぐべし いにしへゆ さやけくおひて きにしそのなぞ

挽歌

巻二 日並知皇子尊のあらきの時よめる　人麿

あめつちの はじめのときし ひさかたの あまのかはらに やほよろづ。
ちよろづがみの かむ(神)つどひ(集) つどひいまして かむはかり(神割) はかりしときに
あまてらす ひるめのみことゝ あめをば しろしめすと あしはら
のみづほのくにを あめつちの よりあひのきはみ しろしめす かみのみ
ことゝ あまぐもの やへかきわけて かむくだし いませまつりし たかひかる。
ひのみこは とぶとりの きよみのみやに かむながら ふとしきまして。
すめろぎの しきますくにと あまのはら いはとをひらき かむあがり。

いましぬわがおほきみみこのみことのあめのしたしらしめし
せばはるはなのたふとからんともちづきのたたはしけんとあ　湛
めのしたよものひとのおほぶねのおもひたのみてあまつみづ
あふぎてまつにいかさまにおもほしめせかつれもなきまゆみのをか
にみやばしらふとしきいましみあらかをたかしりまして
あさごとにみこととはさぬひつきのまねくなりぬる
そこゆゑにみこのみやびとゆくへしらずも。

反歌

ひさかたのあめみるごとくあふぎみしみこのみかどのあれまくをしも
あかねさすひはてらせれどぬばたまのよわたるつきのかくらくをしも

泊瀬部皇女忍坂部皇子にたてまつる歌

とぶとりのあすかのかはのかみつせにおふるたまもはしもつせに
ながれふらばふたまもなすかよりかくよりなびかひしつまのみことの
たたなづくやははだすらをつるぎたちみにそへねね
ばぬばたまのよどこもあるらんそこゆゑになぐさめかねてけ
だしくもあふやとおもひてたまだれのをちのおほのの
あさつゆにたまもはひづちゆふぎりにころもはぬれてくさまくら
たびねかもするあはぬきみゆゑ。

明日香皇女のきのへ乃あらきの時の歌

とぶとりのあすかのかはのかみつせにいしはしわたししもつせに
うちはしわたすいしはしにおひなびけるたまもぞ
たゆればおふるうちはしにおひををれるかはもぞかるればはゆる

みのもかのおかきみおたるそれがらすものごとくころもぶせハがたかみ
おくじちびのひとりしうきそかしおきろやとかまれたまつのゆ
ふきやとてむきにしきしふうつくもとゆきしときにはなべハ
それきとをきがらしにのきたてバかきみずがらしもんきいくのすてき
づきそれがらきをえもれどもおのひかさらづきのいややづらしつおやか
しぎこをとおちあくじでよしておもきひしやしてたまとのかき
ののきやとどもこみやとぞきくめたまつひうおもきたきまめことし
たえぬだいのれかばおやふかなしてぬくをものからこしひつるあさ
よものからきくひそこらだよくそのあもひしるまへてゆよづつのかゆき
のくゆきおかげふねのたゆふもれじおきひやるよりろもにのろび
すこゆえしせんせくもてなとのこしもなのきもたえぬひおめつこの
とんちくしん

いやとかしながく志めびゆのしじられつかくせろおもとのかはよりんづら
すでてしもしくやしけのおかけきこのかくこくこてと
わきのかは志のしこわくしせのそるをバたよがてここつものでゝるあくあし
はよものかはふなびそふらんとなまくやもかのあかきこのみちくこそれせぬ

高市皇子尊の城上の殯宮の時

かくるくしゆしきかしげんきくもおやぶかしこきおもとのなかごのいろ
みえさのこゑばのふれきかぞとこのしこくしぎとしめもふしひてかきつ
いたのく出るひやをみしわがおもきそのきこしやひろとしの
くものてるきたかしふけはやすこえていまぞるさかさしかるらのかゆ
うやふのかたへしてあめのしくるきさめたてしひたとをぐにさぞ
めたるしありとがさくはづきのくにろいくさせめしたよりしてゐる

やするゝ。ちゝゝやハやせど。たつゝたなめくふそれなめとこゝにたなのつゝてよきた
ちきゝ。しれバおほしつゝし。たちゝらおたし。ねりこそるゆくとわかく
したゝくハくるこもおうひさきひとくのかるふづこのすゑばにのづら
の。さゝときくゝでぶそこたなるゝぞのはもわゝたるぞゝう
ちゆるとりわびの。みびゆるやくふやうかゝゝばゝのるびき
いふゆごふでるやしかれバのべぞるよづきてわるひの。かぜのおくく。
なむびくがでゝぐちとてるゆちびのさゝぎぞゆきこふるあゆのは
やしまづしゝの。ちいなきけてるてぞおもよみてぞのかしこきびさ
くれつやのしぞてく。おかゆきのぞれてこそせなりわちびゝ
む。このひしもつゆじめがなよバけめぐくゆくとわのおわらそふそし
よけくゝひの。いつきのぞやゆかむ。ぞふ。やきらぎしし。わこかどもと。

その。めもとみせびぐゝやこふ。おかしいたなびてゞくかずしらしのこれ
とかじるそのつふゝしきましてやさらみし。ぞのおかしきゝのかおの
ふでなくし。ねそへバとろけるど。のしにつくと。ゆるだれのさゝゆる
とるそゝし。わがおかそこそみこのこかぞどの。むこやるるをしてつて。
つのいせる。こかどの。えもむこころへのにきごろもつてばかるやことのこ
かとのいさよおわさむ。そのくるてなくじとくしものなそひふつて。
ぬぞねるのゆみべつしられバおかとめとわみさけしてゞうつしさし。
いなるひりうりつこりしへどもしうこしかれくばかるさしのやさならぬ
れバだねこそしバてらさなるぬるなむひじぼうつるねバちそくゞくさるの
ゆかじすらつはのかくなうしておくもよしきのべのゝやどとこゝやしぎたゆき
つかてかじちぞつゝたゞくらうしぬ。ゑのれども。けがおかしくそのぶらが

まとなかしけりて。つくろし。おくやかのみやらん所にいかなきとぞん
とかくやおめのごころかけこつだまらくきくかんらくもめでんがしこ
のれども。
もふやとのいものつこゝろさんあめ給ゆくこともろくしかわくはまる
素のこゝろのれるのもちてしらある
おるとくしとかるのこゝろはやざやこがせよふしあれバねやごゝろよぶかく
がしるぞやうびゆがえらめてなみでゝるわくゆかバひてしまめでこそねふ
づゝのしらもおちんとおかゝふねのなびたのこてかぞろひのはいのくるふ
ちのこゝろあのこゝろひつおるよやくるひのくれぬるがごと。ちるつきの。
くもがくるごとぐらりあおなびくしいよハかみだちだのまゝぞろいにけし
よたるづゝのつひのいバだのりてゆきなかさふくて　でいらくきくせんまく

あらゆみ。ゆかのこゝろさへてわかこえねバわがらうつるちくのしらくもお
おもひやる。こゝろもあれやしわきくまこがやさとでいでゝしかるのいちら
みやがたるきゞだ。たてくもきぎりわびのやさふかものとあのおちく
ともこゑび。たまがうのふみをゆくしも。ぬらおたふ。まて似しゆらね
バおとべきなよこバよがやすのびてすでそふつつる。
うつそらとおとひしそそるたつきへてがふくあらしぐもそとじの。
つるるたてるつきのきぬころぐのえろゆくるのはろまだぞくろ
ごとく。ゆくつし。いかよいにれどだのすゝしぐころるハあれにゝのゆみう
とうむこしえねバかぞろひのかゆるあくるのよ。さわかたへのか大わ
るい領巾もの。くめやらしなのあまざるるハあしてりひやひかく

れかしのば。わがやこがくらふおんなご。ひとつこのなかしひとすく。ごく
とかあくし。かのしられば。あそこしとおやかかだきこともらかがれこ
とふくるかわがあし。すくらづく。つよやのしもらよえひるはしらしすれとし。
るるはもばきづきあのしたるかずかばらぜんまへあくるよきこすれじらし。お
ふすしきとるて。あかしらのやうづくのやてふ。やがこうするばかいかいひと。
えよのいへばいをねさくらしてなすづこしらんくわずてもさうつせ
こくおもひしいかがかぎるひのかののうたすもこえぬならべば。

吉備津の宰女ここてのおうほまよくふる歌

あさこやかのきつるぶるいもなるたるのどくとのるこうしいはいのきす
ふおかひときうたくづあのすこごきいのなるとつゆえてふあしる
よおきてしゆまばいさゆきいかすまてゆきづまなるてがのしさん。
うきそいおつい。ゆ。かくてくわれもかのうしうてくれくしきこときあ
きたへのしるくくろくてつきぐらぶつきへおくわれおくさの。
ろのつかのこはずしらかなるひてめしくやしらかなるひらふ
らんとくるやまじばまきみしこらがあいつれのこ（や）ゆきう
のごとく（や）

淡波の狭岸の為乃いて仲まてかれる人ぐとふ歌

たくるかしさあきのくにはくふのしらしれどもしおのゐねかしのうら
うしえたまのかききはおおつまるひつまとそかいはむゆのしはのふれ
とつぶてくるたよのの之れしゆふかるしけるいばらるきくれぱらう
かぜくるおしるふくつおきこれば。たるくなことあさへこれいはらふみ
さてくいさあきつぶつらしかしここゆくかねのかならひさぎとってたき

ちゞふらのしたハみがゝづだよりしさこのしるおもおもてまつらず
あくくられバちゝのしゝさもちんでとものはへのたまふる
あらとこひこゝろふひきこえがにへきらぶゆきてもつかへまつる
そこもしハやまとをたちかへのうちにすまふしひおほやしくまつる
かくふかくしげりはてまつるハ。

葛飾の真間乃娘子か墓をとをる時よめる

赤人

いにしへにありけんひとのしづはたのおびときかへて
つまどひしけんかつしかのまゝのてごながおくつきを
こゝとはきけどまきのはやしげりたるらんまつがねのとほくひさしき
ことのみもなのみもわれハわすらゆましじ。

反歌

かつしかのまゝのいりえにうちなびくたまもかりけんてごなしおもほゆ

安積皇子薨らせ給ひし時よめる歌

家持

かけまくもあやにかしこしわがおほきみみこのみことものゝふの
やそとものをゝめしつどへあともひたまひあさがりにしゝふみおこし
ゆふがりにとりふみたてゝおほみまのくちおさへとめみこゝろを
めしあきらめしいくぢやまこだちのしげにさくはなも
うつろひにけりよのなかはかくのみならしますらをのこゝろふり
おこしつるぎたちこしにとりはきあづさゆみゆきとりおひて
あめつちといやとほながによろづよにかくしもがもとたの

のかのしるみこのうかゞのざたくへなれひさやぐらねてばまろくくるころも
ともそてづねやすかしまらひうるまし。いやひとりがたらふそれぞ。
のおしきろかも。
参議篁　　　　　　　　　　よみ人しらず
かくてかくしかをやみかしこし。ふぢはらのやこまろてよひくかいしも
ふかてあれども。きみかしも。おなまして。せとゆきむらひさしの
をなのくつのえうしき。うかみのかとおかみであおかずこてうつ
かしこると。はなしのして。いつしかもえひたるしをてかな
づきのたけしるむて。わがおもひし。このみこそばえるされば。さし
つきがへのうかつひとよりの。たちゆのかくらしてくにとあるなし
なかづきのしづれのおきさば。おかとの。まづりてまえし。つゆかし
ちびるはまたて。またつてるが。たてましのし。しゆきくらゆるふゆの
あしたはさしやむすばねとをし。かづきをおかうてよ。ろしいま
ひとおわそくし。わがおかきみなかにきみくるのひらく。しま
そかくしみけふあのねがふかり。よこかしも。おかずねのたのめ
ろきにおもずれ。ぬかしもさるとるおものをとなれすれば。まえろくる
かぞらてろつくらひしやひ。みやのおかしは。きのかわろ。おきさきぬ
きるはいぬかんもうつきのかくねるのてらくるきしる。かさきも
そのべろうせうゆつわさは。みはそれそこつかしそすかは
ふかすつれしが。ゆくらちうの。たつきをもろうる。おふせるまえる
しきもるみなとのえし。おくのきなる。おかえうでばきう
ぬきしてるとゆつつそねきるはのりしもあるたちのうるつき

ことにはなのこゝろふかげにつたなくまさりがたくてよまれ
かしこのれしも。
巻十五　妻乃みまかれるをきゝてよむ歌　丹比大夫
ゆふさればあしべにさわぐあけくればおきになづさふかもすら
もつまとたぐひてわがをにはしもなふりそとしろたへのはね
さしかへてうちはらひさぬとふものをゆくみづのかへらぬご
とくふくかぜのみえぬがごとくあともなきよのひとにして
わかれにしいもがきせてしなれごろもそでかたしきてひ
とりかもねむ。

歌よいにしへのまなびありいまのてふ
りはそのいにしへはもとよりいまはまな
なほよく古のさまをまねびあやしめ
てしもそれうつろひしさまをもえ
るべきわざなるをあやしくるかれいにし
へいにしへとにいまなりとてふるきのこ
なりとてなほおもひさるそまなべるなり
をまさんれはもやまのめしつゝおもひ

こゝろありてまんえんのゆゑのうた
なるらみやひとはそのこゝろうるはしきは
をえらびていかのいはへるかきたる
まのよとりかるゝともやうてそのゝかん
なかようつしなりて世のうちにへれ
ゆゝ静里いてやいましへそれの中にも
いはしよもいらしとめまふてよなる
本よしも、えるくいましくきのうち

へなほよくいまのうつゝひとしけれ
めをもおもひはしめさしめやそこの
ぬしめてまめなるいさらにしたかひめて
よろこびすしもあらしむ

平春海

此まきの絵ハおの画き給ふこゝろにえらひてかき
すくなきところをおしみ人々のこへによりて
板にゑらしめつなかれとも此ハ誌まくよ
ろこひ出くまて一巻とすへし

寛政のふたとせといふとしやよひの晦日

長瀬真幸記す

寛政六年四月朔日

京都　三條通升屋町　出雲寺文次郎

東都　芝神明前　岡田屋嘉七

長歌[illegible]事に[illegible]史の
[illegible]
[illegible]萬葉集より[illegible]
これ[illegible]迄の[illegible]一[illegible]
江戸の[illegible]みれいふともあら[illegible]

ね月数乃本程(ホド)はいやなはらし
らさしふく(俄)うふを信まより
さ京にまり梳紫かれのこ
と留かも意へつるうまるのはる
是留浅木飛量以おつりんしるる

又古きはえをすれさきのせ給
はせて古婦をはえよみをむ
ふろきふをしいまし丈里
のうよせむ友かわ

本居宣長

歌てふものハ今の世も上ゟかく
くり下ゟ志れまで申抑ハ絶えず
野邊乃かつら林の木の葉の如く
糸枝志げく咲志け茂しとえ
あれともその心ハ河あさ乃

まやかのきりふうらして八溺ふ
踏まよひつゝ奥山のたつねよ八れ
いらぬ人のこれ行くしてあや
うく声れるすさいてまに分ふ
草紙なるけきて上巻の表紙ふ

さ堺ふ茅葉集乃佳詞を於ひ
いてる敷八級長戸辺乃天地
八楽き咲たるして月日の光り
あきらかなるの本しく久るふ山
をくきさうしみもなく音楽ふ

のほらん慧の道をさとしまいらし
くもあらはたすけ給ふなるその
法をこそ行るまことその名歌
とある人のそれかなまことつらの
和歌は道を今さらにふくしも

あしきことはまことそのもれたる哉
ひろひて永く傳へしたる和歌
まなひの道をいよいよまれかつ為歌
くもまたなく身もたかりふかる棟哉
兎角傳テありふありふらひまなふ乃

たゞしきをもわすれてあら
うちふるまふそのちつうとふ
かくなむ志るす
河藤忠惟麿纈帯の
うりやうまして志るす

孫の志ゝも系弥孫志ゝのおほく
なすあるはまた志ゝとものいはれ
いふそ古語あやまりも言葉のみやひを
を取りてそのことのひとつ中も
けすしへその志ゝはさむかしれ
万葉集は上津代のふるなれともさく
のまほくかきあつめたるものあれは

よくそのひとつハとゝもわすれうひ
是なんとの学して古歌をよまれ
飛ゆくほり欲せいハまし人の志乃
よくそのひとつ歌を能名ふみ出か
羅へきものなりとそこ國の我友
世流芭蕉もひたちてけふぬへきさ
歌を万葉ふし姫よりえ〳〵ひ出ふるを

俳諧と名付てすてま学ひあまた
門弟子のことばをひ語ひてをかり
法ありとんとしあれもかしの歌み歌
世そりきてものたえてんハかなへ事と
もやうのまね学風のまね〳〵ゆきてうし
角ちうまもあひはつまてこそとてすこ
歌や俳の風をとふつひ大江門なる執

橘の落ふちらまくしまぬやふかくひ
あかくかららふてくれたあふらけるが
おれのこともあらはられよれ
集の歌をも清う詠来のいやはなへふ
ひ拾ひあつめつゝのあるやし
形見となす物

高本順

萬葉集佳調拾遺

春歌

題しらず

巻八 時はいまは春になりぬとみ雪ふる遠き山べにかすみたなびく　中臣朝臣武良自

巻十 こらがてをまきむく山に春されば木の葉しのぎて霞たなびく　よみ人しらず

巻十八 三島野に霞たなびきしかすがにきのふもけふも雪は降りつつ　家持

巻十 梓弓はる山ちかく家をれば継ぎてきくらむうぐひすのこゑ　よみ人しらず

大宰少貳粟田大夫

巻五
うめの花 咲たる園の青柳は かづらにすべく なりにけらずや

大判事丹氏麿

人ごとにをりかざしつゝ あそべども いやめづらしき 梅の花かも

よみ人しらず

巻十
春雨にあらそひかねて わがやどの 桜の花は さきそめにけり

見わたせば 春日の野べに 霞たち 咲にほへるは 桜花かも

かすが野の 浅茅がうへに おもふどち あそべるけふは わすらえめやも

朝霧に しのゝにぬれて 呼子鳥 みふねの山ゆ 鳴わたる見ゆ

夏歌

読しらに

巻十
春日野の 藤はちりにて 何をかも みかりの人の 折てかざゝむ

久米朝臣廣縄

巻十九
家にゆきて 何をかたらむ あしびきの 山ほとゝぎす 一声もなけ

大伴坂上郎女

巻十
風にちる花 橘を 袖にうけて 君がみためと おもひつるかも

よみ人しらず

野べ見れば なでしこが花 咲にけり わがまつ秋は ちかづくらしも

秋歌

七夕乃うたのうち

よみ人しらず

巻十
天の川 こぞのわたりの 秋風よ なびく我見れど はきたるらし

あき風の吹にし日より天川瀬にいでたちてまつとつげこそ
天川やすのわたりに舟うけて秋たちまつといもにつげこそ
あまの川きり立わたるけふけふとわがまつ君し舟出すらしも
いまやくと
憶良

巻八
久かたの天の川瀬に舟うけてこよひか君がわがり来まさん
よみ人しらず

巻十
わたりもり舟はやわたせ一とせにふたゝびかよふ君ならなくに

天川霧たちのぼるたなばたの雲の衣のかへる袖かも
家持

巻八
たなばたの舟のりすらしまそかゞみきよき月よに雲たちわたる
よみ人しらず

巻十
とほづまと手枕かはし袖かへる夜はなかきをあかずあくらしも
よみ人しらず

あきはぎの枝もとをゝに露霜おきさむくも時はなりにけるかも

巻十
をとめらがゆきあひのわせをかる時になりにけらしも萩の花さく

巻八
高まとの野べの秋はぎこのごろの暁露にさきにけむかも

巻十
こひしくばかたみにせよとわがせこがうゑし秋萩花さきにけり

秋田かるかりほのいほりにほふまでさける秋萩みれどあかぬかも

秋風はすゞしくなりぬうまなめていざ野にゆかむ萩の花みに
猿人々

巻八
わがやどの秋はぎの花風をいたみちるべくなりぬみむ人もがも
よみ人しらず

朝ぎりのたなびく小野の萩の花今やちるらむいまだあかなくに

あきかぜは日にけにふきぬ高まとの野べ乃秋はぎちらまくをしも

巻十
あきかぜに山とびこゆるかりがねはいやとほざかる雲がくりつゝ

かりがねの声きくなべにあすよりは春日の山はもみぢそめなむ

このごろのあかつきつゆにあすよりはみかさの山はもみぢにけり

あしべなる荻の葉さやぎ秋風の吹くるなべにかり鳴わたる

しぐれの雨まなくしふれば真木の葉もあらそひかねて色づきにけり

あき田かるかりほのやどり時雨ふり我袖ぬれぬほす人なしに

冬歌

妹の池乃かもりにおきしもしてそのあくるまし
ゆきふれのごと

よみ人しらず

巻八
池のべの松のうら葉にふる雪は五百重ふりしけあすさへもみむ

しはすの十まり八かの日大監物三形王の家の宴歌

家持

巻十九
あらたまの年ゆきかへり春たゝばまづわがやどにうぐひすはなけ

ときよめる

別歌

大宰帥大伴卿の大納言にまけて京にのぼらす

ときにつくしなるつき人ども葦城のうまやにて

うまのはなむけしけるついでによめる

巻四
月夜よし川音きよしいざこゝにゆくもとまるもあそびてゆかむ　防人佑大伴四綱

題志らず　防人主帳丁若麻績部諸人

巻二十
庭なかのあすはの神に小柴さしわれはいはゝむかへりくまでに

羇旅歌

文武天皇難波の宮にみゆきせる時よめる　宇合

巻一
玉もかるおきへはこがじしきたへの枕のほとりわすれかねつも

題志らず　赤人

巻三
むこのうらをこぎたむ小舟粟島をそがひにみつゝともしき小舟

島づたひみぬめのさきをこぎたみてやまとこひしくたづさはになく　よみ人志らず

いざこどもやまとへはやく白すげのまのゝはぎはらたをりてゆかむ　黒人

はやきてもみてましものを山城のたかの槻むらちりにけるかも　人麻呂

風をいたみおきつ白波たかゝらし海人のつり舟はまにかへりぬ

よみ人志らず

巻七
かぢのおとぞほのかにすなるあまをとめおきつもかりに舟出すらしも

あさりすと磯にわがみしなのりそをいづれの島の海士かかりけむ

巻十四
なごの海の沖つしら波しくしくにあまをとめども出でくる見る

巻七
さゝなみのなくら山に雲ゐれば雨ぞふるちふかへりこわが勢

興麿

巻三
くるしくもふりくる雨かみわのさきさのゝわたりに家もあらなくに

よみ人しらず

巻七
玉つしま見れどもあかずいかにしてつゝみもていかむ見ぬ人のため

持統天皇紀伊の国にいでませるときよめる

巻九
白崎はさきくありまて大舟にまかぢしゞぬきまたかへり見む

読しらず

玉くしげあけまくをしきあたら夜をころもでかれて獨かもねむ

京へまうのぼる時うみべにてよめる

坂上郎女

巻六
わがせこにこふればくるしいとまあらばひろひてゆかむ恋わすれ貝

はまのかひを見てよめる

よみ人しらず

巻七
住のえのとほさと小野のまはりもてすれるころものさかりすぎゆく

すみのえの岸の松がねうちさらしよせくる波の音のさやけさ

次田の湯にやどりて鶴の音をききてよめる

旅人卿

巻三
湯の原になくあしたづは我がごとく妹にこふれや時わかずなく

読しらず

家持

いまよりは秋風さむくふきなむをいかにかひとりながきよをねむ

はつせ川のほとりにてよめる

紀朝臣鹿人

いはばしりたぎちながるゝはつせ川たゆることなくまたもきて見む

題しらず　　よみ人しらず

巻九 大なむちすくな御神のつくりし妹背の山をみらくしよしも

巻九 山城の久世のさぎ坂神代より春ははりつゝ秋はちりけり

はつとさるいかゝまえつく梶の音のいそぎ手すぎの声やしまけりや

巻十二 おほよはつくたぐよいあつべいめぐれ都よ見えそれおわかえ日までふ

とそのかれ天飛ぶかひゆくかみのなれ山越ゆあすかこえなむ

泊瀬河早瀬よりてたかゆゑか夜こそふこえむつまもおもへれ

まつら舟みだるほりえのみをはやみかぢとるまなくおもほゆるこそ

巻十四 草枕ひと人をいさへしぬいくよつまでいそへ来ぬけ森

いはねたひいのねえぬふかきの霧ぞりのかゞのぞすく

清流しめとわたる船のかぢまくらもこれはつまれしで我としそおもり

戀歌

題しらず　　よみ人しらず

巻四 こしぬにのむにのこゝろをきくしらずおのがよそおし人はすぎかてねど

鏡王女にこたふる　　内大臣藤原卿

巻二 玉くしげみむろの山のさねかづらさねずはつひにありかつましを

藤原麿の大夫にこたふる　　大伴郎女

巻四 ちどりなくさほの河瀬のさゞれ浪やむ時もなしわがこふらくは

大伴家持におくれる　　大伴坂上郎女

まる常ねがは雲のみゆ日みくの人ましれほしきゝてもあることを

題しらず　　像児

巻十
秋萩の枝もとをゝにおく露のけなばけぬとも色にいでめやも

よみ人しらず

巻十
わぎも子にあふさか山のはたすゝきほにはさきでずこひわたるかも

家持におくれるうた

笠女郎

巻三
つくまのにおふる紫きぬにそめいまだきずして色にいでにけり

紀皇女の御うた

軽の池乃うらみゆきめぐるかもすらも玉藻のうへにひとりねなくに

ならの山をこえてよめる

長屋王

いそのかみのこじき山をこえよみてねよいふともなぞいでめやも

題しらずて

山口女王

巻四
あしべよりみちくる汐のいやましにおもへかきみがわすれかねつる

大伴宿禰駿河麿

こゝろにはわすれぬものをたまさかにみぬ日さまねく月ぞへにける

坂上大嬢におくるうた

家持

わぎもこがかたみのころも下にきてたゞにあふまではわれぬかめやも

おもひたえわびにしものをなかなかになにかくるしくあひみそめけむ

弓削皇子にたてまつれるうた

巻八
神なびの神よせ板にするすぎのおもひもすぎず恋のしげきに

題しらずて

巻十
こひつゝもけふはくらしつ天の川あすのよるをいつかくらさ年

巻十一
あさ人のやまうらにされ瀬をさやそこゝろもしたにあへるかも

巻四
こゝろそあれしづく雨たがゆゑかぬれしてらがたいうくり

巻十四 〳〵あの年はかるまであひきよがみぢをしめよかりけゆるこのも

巻十四 あさしものやすかはのちたがさみちきせもがきつげかはうまよ

かぐらのすがたをふきねぎさる雲たなびくよしくもひのしげく

三國まひと人足

よみ人しらず

巻十 春されば水くさのうへにおく霜のけつつもわれは恋わたるかも

秋の田乃ほのうへにおく白露のけぬべくもわは思ほゆるかも

秋萩の枝もとををにおく露のけかもしなまし恋つつあらずば

巻十一 春柳のかづらき山にたつ雲のたちてもゐても妹をしぞおもふ

巻十 みちのべ乃をばながしたのおもひ草いまさらさらの袖かれもせむ

巻十一 まそかゞみのうつしおもも敷いまし旅ひるしいとゞ恋しきをれて

あられふりかゆし浪のおとくもれはおもはじしらひてもあかぬも

まがせこれあふひおもしがすがやどのはぎさへかりひろしがれふかしり

みなそこにおふる玉藻のうちなびき心をよせてこふるこのごろ

それがたのこれなりつれどしろ妙の衣袖をむすびしもがも

志賀のあまのひけぶりたきてやくしほのからき恋をもわれはするかも

山こえのみやべによする玉藻のたゆることなく見むよしもがも

いせのあまのあさなゆふなにかづくといふあはびの貝のかたおもひにして

巻十二 おもへども思ひもかねつ足曳の山鳥の尾のながきこの夜を

のちしこひむものとしらせばよひよひにきませてはしさみせ

よひよひにきませてあしさひきゆる白露のけぬべき恋もわれはするかも

夏のあら野の小田にかるくさのおりひさかれてある夜しぞおほき

われも見つ人にもつげむかつしかのまゝのてごながおくつきどころ
赤人

巻三
みさごゐるいそまにおふるなのりその名はのらしてよおやはしるとも
よみ人しらず

巻十三
衣手に山おろしふきてさむき夜を君来まさずば独りかもねむ
家持

巻八
あきされば庭にふきしくさむき秋かぜをまつらん[illegible]ねせ
よみ人しらず

巻十
秋の夜をながしといへどつもりにし恋をつくせばみじかくありけり

巻十一
夕けにもうらにものれるこよひだに来まさぬ君をいつとかまたむ
ねもころに[illegible]のまなくぬまがいへりつらむ[illegible]

巻十二
みる人の[illegible]ふみ[illegible]おりてみちゆかば[illegible]おもふ人
[illegible]おもふらさ
山口女王

巻八
秋はぎにおきたる露の風ふきておつるなみだはとゞめかねつも
よみ人しらず

巻十
はふりらがいはふやしろのもみぢばもしめ縄こえてちるといふものを

巻四
[illegible]ありてくるしふにたる妹が家[illegible]いつらむ[illegible]

巻十一
[illegible]のつゆしあまがあして[illegible]
[illegible]おもひそれなれ[illegible]もたれ[illegible]すぎこしを
おもひそは[illegible]ひきうらを[illegible]年はのごと[illegible]

巻八
[illegible]雲のゆきゝ[illegible]きのたを
おほかたに[illegible]妹をおもひて[illegible]の[illegible]

巻十二
ゆふづく夜あかときやみのおぼつかなく見えし人ゆゑにこひわたるかも
ぬるがけふまがいたらぬかぎろひのほのかに見えていにし子ゆゑ

巻十一
ますかゞみてにとりもちてあさなさな見れども君はあくこともなし
しつけおものしほかきでゐるもあるれどもひとよ独ねすればあかつも

巻十二
ぬるなきされくされぬ人しろくおくつゆのきえしかどもわれしいひし君はも

巻十一
うち猶まそて梅ずおもひそでて雲たちかへるこゝろなかなかに
あしがきのみそのふよめる雲井たちそひつゞるまつひもすがらを
きえなふのあさての浪風まずれ見へ家からずすれど年の暮あかも

巻十二
あふあけぼのしくあらぬ玉の緒乃長き命のをしからぬかも

哀傷歌

天智天皇の崩御ありける時よめる　額田王

巻二
かゝらむとかねてしりせば大みふねはてしとまりにしめゆはましを

舎人吉年

やすみしゝわが大きみの大みふねまちかこふらむしがのからさき

志貴皇子のみまかれるときよめる　よみ人しらず

高まとの野べの秋はぎなちりそね君がかたみに見つゝしのばむ

いはしろの結び松を見てよめる　意吉麿

岩代の野中にたてるむすび松心もとけずいにしへの人おもほゆ
えどころみえ月やうらうらかなしそてよめる
家持

巻三
今よりは秋かぜさむくふきなむをいかでかひとりながき夜をねむ
うつせみの世はつねなしとしるものを秋風さむみしのびつるかも

吉備津の采女がしにける時よめる　人麻呂

巻二
さゝなみのしがつのこらがまかりぢの川瀬の道を見ればさぶしも

さぬきのさみねの嶋のいそのちにふせる人を見て

人麻呂

おきつ浪きよするありそをしきたへの枕とまきてねせる君かも

雑歌

元明天皇藤原の宮よりならの宮にうつりませる時

大御うた

巻一
飛鳥のあすかの里をおきていなばきみがあたりはみえずかもあらむ

三吉野のみやこをこひてよめる　よみ人しらず

巻四
みくまのゝうらのはまゆふもゝへなす心はおもへどたゞにあはぬかも

長皇子の猟路の池にあそびたまへる時よめる

人麻呂

巻三
久かたの天ゆく月をつなにさしわが大きみはきぬがさにせり

弓削皇子のよしのにあそびたまへる時よめる

長田王

さましぬのはら船のとまりにさされつゝまたふあふみもとほくゆかもいなくに

題しらず　宣令

巻三
みよし野のたぎつの白浪しらねどもかたりしつげばいにしへおもほゆ

活道の岡にて一つ松をよめる　市原王

巻六
ひとつ松いくよかへぬる吹風のこゑのきよきは年ふかみかも

題しらず　よみ人しらず

巻九
はるさくとあれどもかつちてうすきし山のかひてたなびくしらくものさき浜

憶良

志賀浜のあまのまつがねのまくらづきかくてよやまず年のなかきに

太上天皇左大臣橘朝臣の家にみゆきしてとよのあかりしたまひける時よめる　左大臣橘卿

巻十九
むぐらはふいやしき宿も大君のまさむとしらば玉しかましを

聖武天皇にたてまつれる　桜井王

巻八
ながつきのその初雁のつかひにもおもふ心はきこえこぬかも

御かへし

大うみのその長浜によする波ゆたけくきみをおもふこのごろ

みやこにのぼりてのち沙弥満誓におくれる歌

ふたうた　旅人卿

巻四
こゝにありてつくしやいづく白雲のたなびく山のかたにしあるらし

くさかえの入江にあさるあしたづのあなたづたづしともなしにして

大伴宿祢池主におくれるうた　家持

巻十七
うぐひすのなきちらすらむ春の花いつしか君とたをりかざさむ

妹坂上大嬢におくれるうた　大伴田村大嬢

巻八
わがやどの秋のはぎさく夕かげにいまもみてしかいもがすがたを

聖武天皇左大臣長屋王の宅にみゆきしてとよの
あかりきこしめしし時の大御うた

あをによしならの山なる黒木もてつくれるやどはませどあかぬかも

長歌

舒明天皇の内野にかりしたまへる時よみてたてまつら
しめ給へる中皇女の御うた

巻一
やすみしゝわが大君のあさにはとりなでたまひゆふべにはいよりたゝしゝみとらしのあづさの弓のなかはずのおとすなりあさがりにいまたゝすらしゆふがりにいまたゝすらしみとらしのあづさの弓のなかはずのおとすなり

みちのくの山よりくがねいでてたてまつりし時のみこと
のりをかしこみてよめる　家持

巻十八
あしはらのみづほの国をあまくだりしらしめしけるすめろぎの神のみことの御代かさねあまのひつぎとしらしくる君の御代御代しきませるよものくにゝは山川をひろみあつみとたてまつるみつぎたからはかぞへえずつくしもかねつしかれども

まろ人をいざなひのひよきにてはえらじ失給ひてくずみこのも
ためしなくあらむとおもほして志さうやまひ小和ぐ給ふ東の
國の裝束く乃小田ろうら山ま金ありくまへし たまへ主忠を
あきらめさらひて他の祥あひすゞろひすゑろぎ比 活さめ
たすそへてとほうさ代よりらかしりと給わが御世あらためて
ほまくバたまさぐれたるさうえむそのこと 祥なだし おほはじめて
その幽乃八十とものをくまつる人のむねのさにりてむびても
なまなげにもまなねがふ心ざしひまなずであひあさあれ人バ
ころをしもあやそしかかくるみそかしりくいようにおもひて大伴の
とほつ祥杉やの非の名をとび大来目あしとおもひすちて
つへしつきはゆるびらづくかむなる山あるバ草まむかむなる

おほきこ氏をふして志るされ出りえハせじとこそまうすなれ
なのきよれその名をいひし人よくそのなをづきしたがさんなりかのなかども
そで大伴と佐伯の氏ハ人の杉やろたつるとぞさて人は子ハおやの名
さるをで大君ふまりら人をのしいひつがるこの清らきをおづさちまま
とりさちて级太刀腰にとりたれあさまもり夕のまもりにおほ
きみのみかどのさしまりあれとをかまえてまた人はおほしくやそ
にあひしまさる大きみのおほしのさきみをきけべそ事もし
ほきりあれされるその志比りつまだをしめらんを
いふくてよめる
巻二十 部 幸
杉尾まされよほのみかどし志ろめひつかりしの出ハあなくまりら
おさ人の墟ぞしきまうしなされよまれ國よ人まされまちそれあき

どゝが帰。あなたのくせ。いでもひかつり見せずでて。いとゝくる。
たゞさへいとゞねぶまむひまけのまたく。たらちねの母が目されて
て。ゆくさのつまばを御らぶ。あら露の月日とみつく暮らちる。
難波の芦葉に大船より。来りひとぢぬき。船たりふかあとの人。
夕しげふかぢつひきえとわあくりひて。あぎやくえたる浪のまね
いまさぐるみまさいへもちやくいさわらく。なきみ此をまちの
まなる。まれ旅の心をとりちてあり先がわらしをたうらハ。
つくまりぞ。出つあきさせしいとひべをとくにふすさくゆかの
袖をかくへしぬなもの尾髪おきてすがふけ紙御ちくを
こるひむもしきつまらは。

大きみのはてしかしこく。つまうされかのしくハおれぐまはらたとの
むかりまのしとりあるひ。門むをすまべ。たらちね母さまで
若くさの妻とりつき。たのらく。これハいろむ。まさわくて
あやうつこし去秘めち。浪をのぐひむせびつ。とくひすれば
もしかのぞうちそふとぞ。うけ事。かつの見しつ。いやとわれ
おきさまされ。いやたかれ山紙と云すぎ。おしがちるなれたるみ
きみつく。夕しげふ舟をうけすゑ。あさうすぐれ御むけこぬと
さすらふとつゞえる時ふ。まさ霞。ゑまふるあちてさつゞよれ。
ふらしくたなるべたらくふかぬえを。おりひぞ。おひぞやの指もし
ゆるまぐ。なづぬれつゝてのるも。
ここの広さとつくやりいつくませる時おなしめるくりおくるを

るうき　　季村

巻四 こゝろ・たびのやどりにおもひくの名乃ゆきおもひふて雲のよそ・
はなつかしくはむよしの花なれどこゝろのとむせつあるに・
て秋の外とよめくしさ人の夜よ久てもおのづましたの光る・
ふとひ・秋の紅れすよれながくおやとこせぬかな・

まし人る人をさなすぐして

巻五 ちゝ改られどくつし素子されば世んぐしつくし世の中へ・
かくぞてとまつるちゝろれくらだしなまゆく人にまつねだにけ・
ぐらをとぬぎ信るごとくふみぬ都でゆくちゝ人も岩木よりなく・
人の・汝がためのしさ子て人ゆりだにたがまたし地たちば大える時に・
このてす・つきも民下ハてまされむり子すきりも岩ぶのさまよ

きみさえしを手・国のまんるぞぶかくてあかしきさんく・
志らふきあらじろ・

旋頭歌

自讃うく

巻六 御ほい人よ志らえぞ志らぞとよし志沢よまれ墓てば忠らぞらぞもよし

元真古僊

東歌

信濃うく

巻十四 志なぬなるすゞ氏あし野よ時なたく長手けばとれすゞぶかれり

かつきうく

なつそびくうなかみがたの沖津すに船はとどめよさよふけにけり

萬葉集佳調拾遺 終

昭和學園 圖書
第18593號
受入
昭36. 3. 14

書肆

京都三條通升屋町 出雲寺文次郎

同 寺町通松原下ル 勝村治右衛門

大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛

江戸日本橋通壹丁目 秋田屋太右衛門

同 本町通横山町壹丁目 須原屋茂兵衛

同 出雲寺萬次郎

同 芝神明前 岡田屋嘉七